

佐倉市佐倉城跡

— 千葉県立佐倉東高等学校共学化事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 —

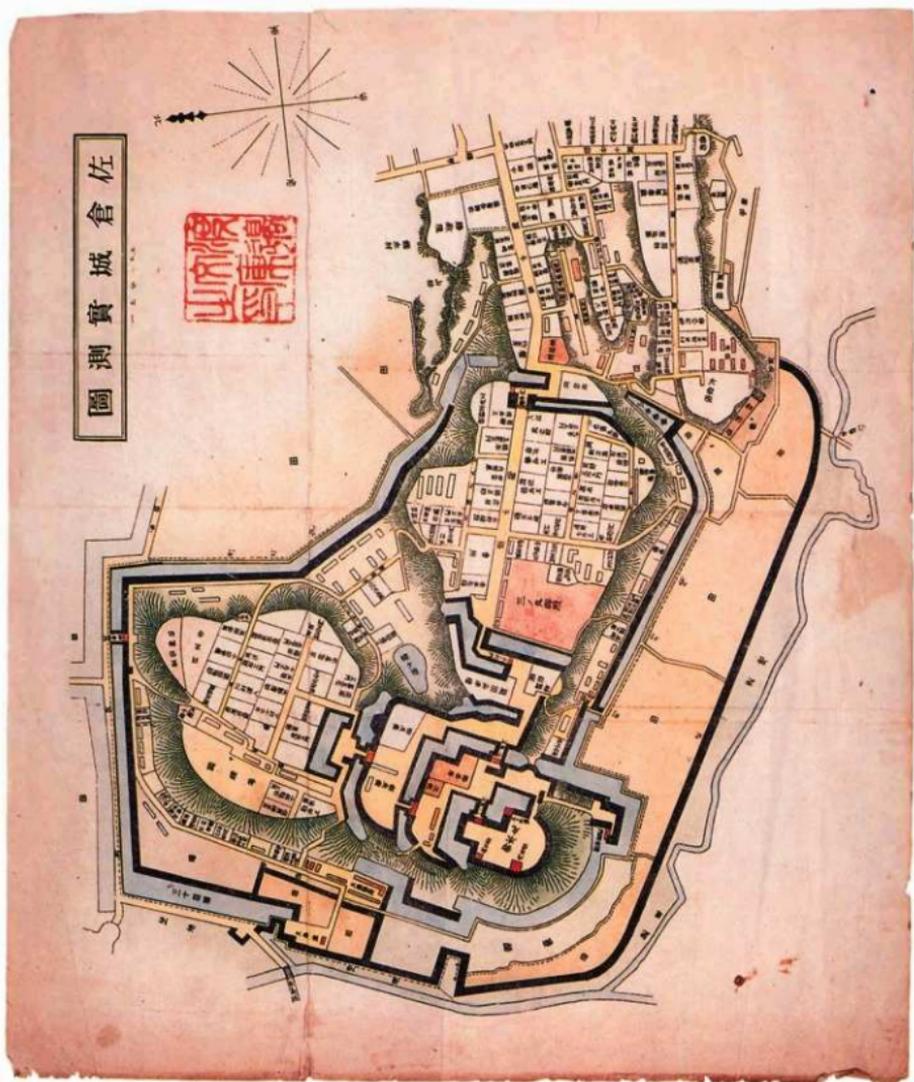
平成16年10月

千葉県教育委員会
財団法人 千葉県文化財センター

佐倉市佐倉城跡

—千葉県立佐倉東高等学校共学化事業に伴う埋蔵文化財調査報告書—





「佐倉城実測図」佐倉市所蔵



出土陶磁器 (抜粋)

序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第498集として、千葉県教育委員会の県立佐倉東高等学校共学化事業に伴って実施した佐倉城跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。この調査では、近世佐倉城に関連する建物の柱跡や陶磁器等が検出されるなど、この地域の中近世の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また、本地域の歴史を知るための資料として広く活用されることを願っております。終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成16年10月

財団法人千葉県文化財センター
理事長 清水新次

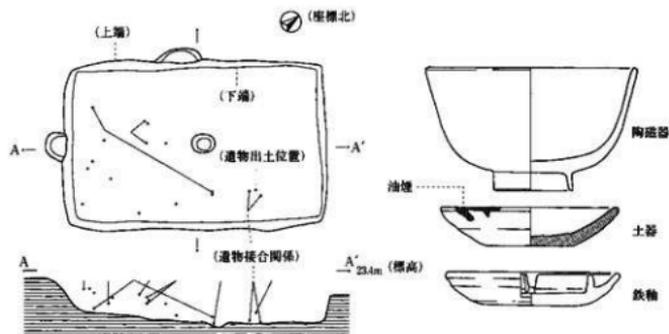
凡 例

- 1 本書は、千葉県教育委員会による県立佐倉東高等学校共学化事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県佐倉市内町278番地に所在する佐倉城跡（遺跡コード212-040）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県教育委員会の指導のもと、千葉県教育庁企画管理部施設課の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業は、北部調査事務所長古内茂のもと、上席研究員 岸本雅人が下記の期間に実施した。

発掘調査 平成16年4月5日～平成16年4月28日

整理作業 平成16年4月30日～平成16年6月30日

- 5 本書の執筆は、上席研究員 岸本雅人が行った。
- 6 巻頭図版1の佐倉市所蔵「佐倉城実測図」の掲載については、佐倉市史編纂室の御協力を得た。
- 7 陶磁器の鑑定に当たっては、県立房総のむら上席研究員井上哲朗氏に御指導、御教示を得た。
- 8 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県教育委員会、佐倉市教育委員会、佐倉市史編纂室、県立佐倉東高等学校、(財)印旛都市文化財センターの御指導、御協力を得た。記して謝意を表する。
- 9 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
第4図 国土地理院発行 1/25,000地形図「佐倉」(N1-54-19-14-2)
第5図 佐倉市役所発行 1/2,500都市基本図「佐倉IX-LE08-2」「佐倉IX-LE08-4」
第6図 佐倉市役所発行 1/10,000都市計画図「佐倉1」
- 10 周辺地形航空写真は、京業測量株式会社による平成16年撮影のものを使用した。(写真縮尺1/10,000)
- 11 本書で使用した図面の方位は、すべて調査時の旧公共座標（国家標準直角座標第Ⅸ系）における北である。
- 12 本書で呼称した遺構番号は、編集の都合上、調査時の番号と異なる。
- 13 遺物は全て通し番号で、実測図は実測図版として写真図版と対応するように図版ページに掲載した。
- 14 挿図に使用したスクリーントーン及び記号の用例は、次のとおりである。



本文目次

I	はじめに	1
1	調査の概要	1
(1)	調査の経緯	1
(2)	調査の方法	1
2	遺跡の位置と環境	2
(1)	遺跡の位置	2
(2)	遺跡の環境	3
II	検出された遺構と遺物	7
1	検出遺構	7
(1)	遺構の概要	7
(2)	建物柱跡	7
(3)	土坑	9
(4)	ビット状遺構	12
2	出土遺物	15
(1)	遺物の概要	15
(2)	陶磁器	15
(3)	土師質土器・在地系土器	18
(4)	その他の遺物	23
III	まとめ	25
1	検出遺構について	25
2	出土遺物について	27
	報告書抄録	巻末

挿図目次

第1図	調査区及び上層発掘調査終了範囲	2	第7図	遺構配置図	8
第2図	下層確認グリッド配置図	2	第8図	土坑実測図①	10
第3図	土層柱状図	2	第9図	土坑実測図②	11
第4図	遺跡周辺地形図	3	第10図	ビット状遺構実測図①	13
第5図	調査区位置図	4	第11図	ビット状遺構実測図②	14
第6図	調査地点と佐倉城内関連調査地点	5	第12図	「佐倉御城実測圖」	26

表 目 次

第1表	杭座標一覧表	2	第7表	出土土師質土器・在地系土器観察表	22
第2表	佐倉城内関連調査地点	6	第8表	出土金属製品観察表	23
第3表	建物柱跡観察表	9	第9表	出土瓦製品観察表	24
第4表	土坑観察表	11	第10表	出土石製品観察表	24
第5表	ピット状遺構観察表	14	第11表	出土土製品観察表	24
第6表	出土陶磁器観察表	19			

写真図版及び実測図版目次

巻頭図版1 「佐倉城実測図」

巻頭図版2 出土陶磁器（抜粋）

1. 遺跡・遺構

写真図版1 佐倉城跡航空写真（縮尺約1/10,000）

写真図版2 1. 調査区近景（南西→）

2. 調査区遺構全景（北東→）

写真図版3 1. 調査区遺構全景（北→）

2. 調査区遺構全景（南西→）

写真図版4 1. 建物柱跡（北→）

2. 建物柱跡（北西→）

3. 柱5（南西→）

4. 柱6（南西→）

5. 柱9（南西→）

6. 柱10（南西→）

7. 柱11（南西→）

8. 柱12（南西→）

9. 柱16（南西→）

10. 柱17（南西→）

11. 柱18（南西→）

12. 柱19（南西→）

13. 柱20（南西→）

写真図版5 1. 土坑1 遺物出土遠景（南西→）

2. 土坑1 遺物出土近景（南東→）

3. 土坑1 完掘（南西→）

4. 柱2完掘(南東→)
5. 土坑3完掘(西→)
6. 土坑4遺物出土状況(東→)
7. 土坑5完掘(南→)
8. 土坑6完掘(南西→)

- 写真図版6
1. 土坑7完掘(西→)
 2. 土坑8完掘(西→)
 3. 土坑9完掘(南→)
 4. 土坑10完掘(南西→)
 5. 調査終了後に検出された建物柱跡
(南東→)
 6. 調査終了後に検出された建物柱跡
の柱3(北東→)
 7. 本跡基本土層(南東→)

2. 出土遺物

- | | | | |
|--------|--|-------|--|
| 写真図版7 | 陶磁器1～4 | 実測図版1 | 陶磁器1～13 |
| 写真図版8 | 陶磁器5～13 | | |
| 写真図版9 | 陶磁器14, 15, 17, 18, 20 | 実測図版2 | 陶磁器14～37 |
| 写真図版10 | 陶磁器16, 19, 21～37 | | |
| 写真図版11 | 陶磁器38～43, 45, 47 | 実測図版3 | 陶磁器38～58 |
| 写真図版12 | 陶磁器44, 46, 48～58 | | |
| 写真図版13 | 陶磁器59, 60 | 実測図版4 | 陶磁器59～68, 70, 72, 73
土師質土器69, 71 |
| 写真図版14 | 陶磁器61～68, 70, 72, 73
土師質土器69, 71 | 実測図版5 | 陶磁器74～81, 83～85, 87～98 |
| 写真図版15 | 陶磁器74～81, 83～85, 87～98 | 実測図版6 | 陶磁器99, 108～116
土師質土器82, 86
在地系土器100～107
金属製品124～135 |
| 写真図版16 | 陶磁器99, 108～116
土師質土器82, 86
在地系土器100～107
金属製品124～135 | | |
| 写真図版17 | 瓦製品117～122
土製品123
石製品136～138 | 実測図版7 | 瓦製品117～122
土製品123
石製品136～138 |

I はじめに

1 調査の概要

(1) 調査の経緯

千葉県教育委員会は、県立佐倉東高等学校の男女共学化に伴い、敷地内の現体育館脇に格技場を建設する計画を具体化した。県立佐倉東高等学校は、佐倉城跡内に所在し、昭和42年10月30日に現在地（城内町）に移転して現在に至っている。佐倉城跡内では現在までに16回の調査（立会も含む）が行われ、近世佐倉城を中心とした遺構・遺物が数多く確認されている。このことを踏まえて、県教育庁教育振興部文化財課と同企画管理部施設課との間で、その扱いについて慎重な協議が重ねられた。その結果、計画の中止及び建設地の変更は不可能であったので、事前の発掘調査を行い記録保存する運びとなった。この発掘調査は過去16回の調査成果を踏まえ対象範囲の全面本調査となり、当センターが県教育庁企画管理部施設課の委託を受けて調査を実施することとなった。平成16年1月20日には県文化財課と佐倉東高等学校及び当センターの三者による現地踏査が行われた。また、同年4月2日には県教育庁企画管理部施設課と佐倉東高等学校及び当センターの三者による現地協議が行われ調査範囲が決定された。発掘調査は、対象面積667㎡の本調査で、平成16年4月5日から4月28日まで実施した。

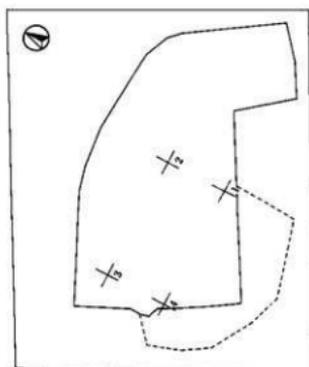
(2) 調査の方法（第1, 2, 3, 6図, 第1表, 写真図版6-5, 6, 7）

調査区は現体育館の北側に位置し、長辺29m、短辺23mのほぼ長方形の範囲で、調査区内には径200mmのヒューム管が東西方向と南北方向に2本埋設されており、遺構検出面まで約3.5mの深さがあったので、県文化財課と協議の上、安全を最優先した発掘調査となった。遺構確認面までの埋土は重機で除去しながら、調査区内の壁面の崩落を防ぐため傾斜をつけながら掘り下げ、さらに途中で2m～3m幅のテラスを設ける方法をとった。このような条件が重なったため、実質の調査面積は当初より大幅に減少した。方眼杭は遺構検出面に到達した時点で、第1表に示したように国家座標にしたがい設置した。

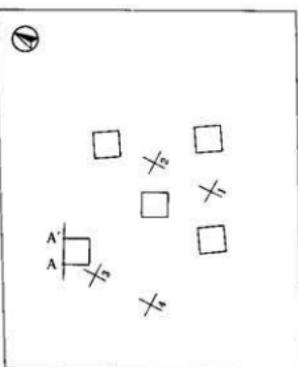
第4図は上層発掘調査終了範囲を示しているが、北側隅の部分はヒューム管が東西に埋設されていたため、調査不能となった。また、点線部分は、検出された建物柱跡の繋がりを見極めるため、調査終了後の埋め戻し直前に、重機で拡張した部分である。この部分からは8基の建物柱跡が検出されたが、危険であるため実測等は行わず、上から写真撮影をし、後に全測図に投影した。

第5図は上層調査終了後に下層調査を行ったグリッド配置図で、遺構、遺物は検出されなかったので確認調査で終了した。

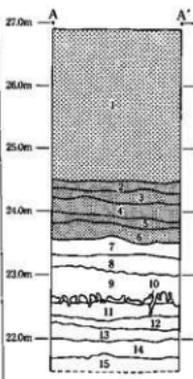
第6図は現土表面からの土層柱状図で、下層確認終了面まで約5.5mである。薄い網を掛けてある1層は、佐倉東高等学校が移転及びプール建設に関連した昭和40年代の埋土であり、強く填圧され非常に固くしまっている。佐倉東高等学校「創立七十周年記念誌」によれば、整地作業には自衛隊が尽力したとあり、埋土の厚さからしても大規模なものであったことが窺える。ここではこの埋土を「埋土1」と呼称する。やや濃い網掛けの2～6層はそれ以前の埋土で、時期は、埋土内から小銃の弾が出土したことにより、第二聯隊進駐の頃から練兵場完成までの時期と思われる。この埋土を「埋土2」と呼称する。



第1図 調査区及び上層発掘調査終了範囲 (1/400)



第2図 下層確認グリッド配置図 (1/400)



第3図 土層柱状図 (1/80)

第1表 杭座標一覧表

杭番	X座標	Y座標
1	-31415.0000000	35300.0000000
2	-31410.0000000	35300.0000000
3	-31410.0000000	35290.0000000
4	-31415.0000000	35290.0000000

1. 暗黄褐色……埋土1 ハードローム塊、ブロック、コータの板、コンクリート等多量のがらが混入。赤色に強く染められた土である。(昭和40年代の校舎移転新築工事及びプール建設に伴う埋土)
2. 黒灰褐色……埋土2 大粒の粘土塊が若干混入され強い粘りがある。(埋土2の上層で陶磁器・瓦類が多く混入。若干の土師器・須恵器も混入)
3. 明黒灰褐色……埋土2 3層より若干明るく粘土塊は多量。小石少量混入。(埋土2の中間で陶磁器・瓦類が多く混入。若干の土師器・須恵器も混入)
4. 明黒灰褐色……埋土2 3層より若干暗く粘土塊は減少。小石・砂粒を多量混入。(埋土2の下層で陶磁器・瓦類が多く混入。若干の土師器・須恵器も混入)
5. 暗黒色……埋土2 砂粒多量混入。しまりはない。(埋土2の下層で陶磁器・瓦類が多く混入。若干の土師器・須恵器も混入)
6. 黒色……埋土2 若干のローム状・砂粒混入する腐植土層。粘性はあまりなくしまりはない。(1層は取り込まれ少量混入)
7. 明黒褐色……Ia～Ib層 ローム多量混入し若干の炭灰を呈す。前期チフラを含むが分層不能。
8. 暗褐色……Ic層 9層の炭灰層。7層のしみ込みがあり黒っぽい。
9. 明褐色……II層 比較的厚く、瓦類を取り込んでいる。
10. 明褐色……IV層 比較的厚く、瓦類に取り込まれている。
11. 明黄褐色……V層 白っぽいチフラを少量混入。
12. 暗黄褐色……VI層 赤色スクリヤを少量混入。
13. 明黄褐色……VII層 11層と比較すると若干黒みを帯びる。A7混入。
14. 暗褐色……IX層 層2黒色層下層であるがほとんど黒みが無い。
15. 暗褐色……X層 まわめて厚く分層不能。

2 遺跡の位置と環境

(1) 遺跡の位置 (第4, 5, 6図, 第2表, 写真図版1, 2-1)

佐倉市は千葉県北部の中央に位置し、市域の形状は鉤手状に近く、酒々井町、八街市、千葉市、四街道市、八千代市、印旛村と周囲を接する。佐倉城跡は市域の中では最も東寄りの酒々井町に近い場所にあり、地形的には、県北部に広がる下総台地のほぼ中央に位置する。佐倉城跡が位置する台地は、標高約28m前後で、ほぼ北西から南東に馬の背状に細長い台地である。台地からほぼ北西に直線距離で3.5kmに印旛沼があり、それに流入する多くの河川によって台地周辺は開析され、現地形が形成されている。また、この台地のすぐ南には高崎川が流れ、鹿島川に合流し、台地を回り込むかのように印旛沼へ流入する。

今回調査した地点は、県立佐倉東高等学校の体育館の北側で、平成9年4月に調査した同高部室建設に伴う発掘調査地点から直線距離で50mの地点である。

佐倉城跡内での発掘調査は立会も含めて、昭和46年7月25日をかきわりに過去16回行われている。その点からすれば、今回の調査は17次の調査となる。

(2) 遺跡の環境 (第6図, 第2表)

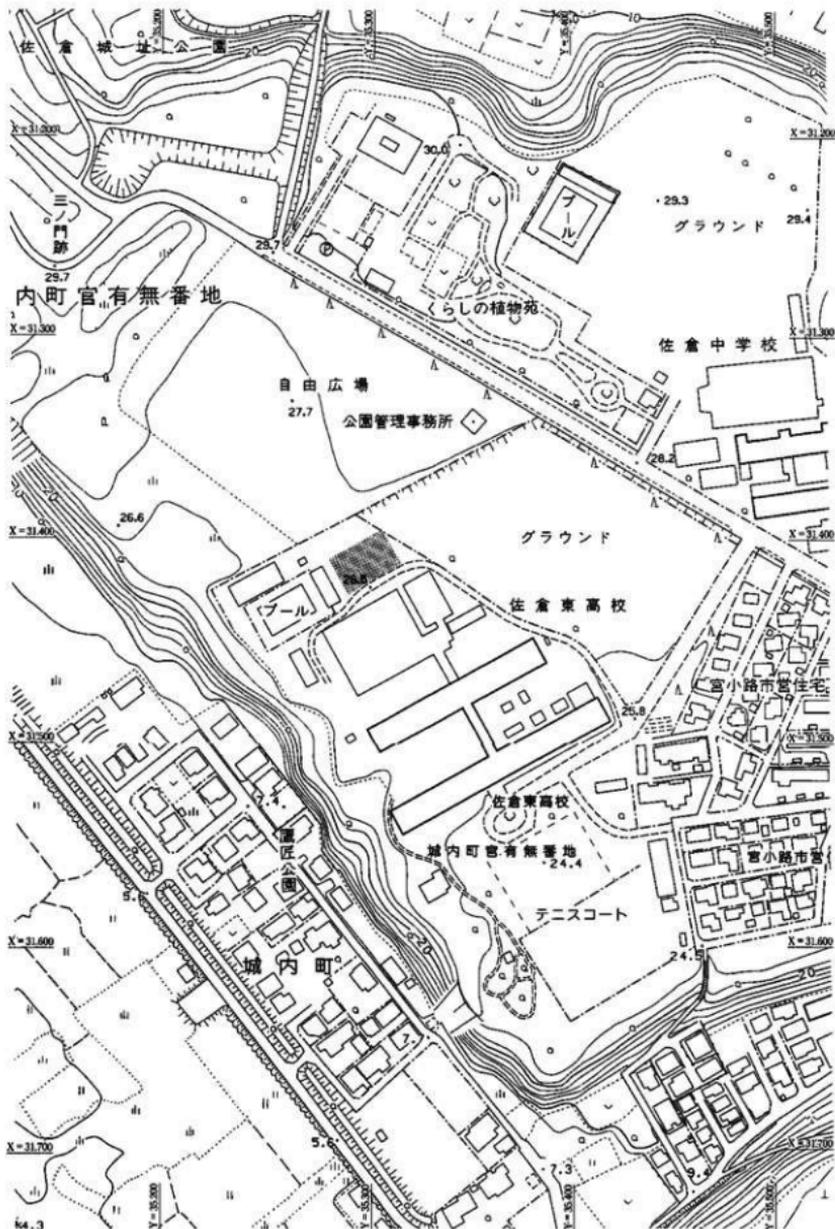
近世佐倉城は、北は印旛沼から続く低地をひかえ、南と西を鹿島川とその支流高崎川が形成した断崖絶壁の台地上に立地している。佐倉城は、中世末期に現在の酒々井町にある本佐倉城に本拠を置いた千葉氏が鹿島城として縄張りをし、築城工事を始めたのが起源とされている。しかし、その後築城は中断し、本格的築城は、慶長十五年四月土井利勝が小見川一万石から徳川家康に佐倉領に移封を命ぜられてからになる。築城には約6年を要し、元和二年の頃にほぼ完成した。以後は鹿島台の一帯を佐倉と称し鹿島城は佐倉城と呼称され、9家20名の城主を迎え約250年間続いた。近世佐倉城については「まとめ」で後述する。

明治4年の廃藩置県後も佐倉城内には居住者がおり、辛うじて佐倉城として威容は保っていた。しかし、軍政改革に伴い明治7年に歩兵第二聯隊が兵舎を建て屯営する頃には、居住者は全て引き払い、それと同時に城関連の建物も取り壊され、近世佐倉城は軍事施設地として大きく変貌していった。歩兵第二聯隊は日清・日露戦争(旅順, 奉天等)に派兵された。代わって明治40年には第五七聯隊が入り、昭和11年の二・二六事件後満州に進駐し、太平洋戦争ではノモンハン、主力はレイテ島に派兵された。その後昭和12年には第一五七聯隊が編成され、太平洋戦争では中国へ派兵された。

戦後、軍は解体され、国立佐倉療養所、佐倉市立佐倉中学校、県立佐倉東高等学校が建設された。そし



第4図 遺跡周辺地形図
(国土地理院2万5千分の1地形図「佐倉」より)



第5図 調査区位置図 (新掘け部分)
(佐倉市基本図1/2500より)

て、療養所跡地には国立歴史民俗博物館が建設され、その周辺には歴博の付属施設も建設され現在に至っている。佐倉城跡の発掘調査も上記のことを契機に調査例が増え、その全貌が明らかになりつつある。

第6図と第2表は、本調査地点と佐倉城跡内発掘調査履歴を表したものである（挿図番号と表番号は一致する）。1次の国立歴史民俗博物館建設に伴う昭和46年7月25日～8月13日の千葉県教育委員会の調査を発端に、歴博関連の調査が2次、3次、4次、5次、7次、8次、9次に及ぶ。6次は佐倉市が「城址公園」の整備の一環として本丸跡の調査を行っている。また、(財)印旛都市文化財センターでは12次で市立佐倉中学校給食室建設に伴う調査、14次で同中学校体育館建替工事に伴う調査を行っている。15次も同七



第6図 調査地点と佐倉城内関連調査地点
(佐倉都市計画図1/10,000より)

第2表 佐倉城内関連調査地点

No	調査期間	調査面積	調査機関	遺定地	報告書
1	昭和46年7月25日～ 8月13日	400㎡	千葉県教育委員会	榎木曲輪 三の丸	1971「国立歴史民俗博物館設置予定地内遺構調査報告書」千葉県教育委員会
2	昭和51年6月1日～ 7月31日	1,300㎡	助千葉県文化財センター	榎木曲輪 馬出	1976「国立歴史民俗博物館（仮称）設置予定地内遺構確認調査報告書」助千葉県文化財センター
3	昭和52年1月28日～ 3月28日	1,200㎡	助千葉県文化財センター	(堅穴住居跡群)	
4	昭和52年11月7日～ 昭和53年1月31日	1,200㎡	助千葉県文化財センター	榎木曲輪	1977「国立歴史民俗博物館（仮称）建設予定地発掘調査報告書」助千葉県文化財センター
5	昭和54年12月11日～ 昭和55年3月31日	1,650㎡	助千葉県文化財センター	二の丸～三の丸 曲輪	1980「千葉県佐倉市 佐倉城跡遺構確認調査概報」助千葉県文化財センター
6	昭和55年1月19日～ 3月27日	14,000㎡	佐倉市	本丸	1982「総州佐倉城」佐倉市
7	昭和55年12月1日～ 昭和56年3月31日	800㎡	助千葉県文化財センター	天神曲輪	1981「国立歴史民俗博物館（仮称）建設予定地発掘調査報告書」助千葉県文化財センター
8	昭和58年10月3日～ 12月3日	1,300㎡	国立歴史民俗博物館	天神曲輪	1984「国立歴史民俗博物館研究員宿泊施設予定地発掘調査概報」国立歴史民俗博物館 2004「佐倉城跡発掘調査報告書」国立歴史民俗博物館
9	昭和59年7月10日～ 昭和60年1月24日	3,000㎡	国立歴史民俗博物館	榎木曲輪東半部	1986「佐倉城の武家屋敷は語る」国立歴史民俗博物館 2004「佐倉城跡発掘調査報告書」国立歴史民俗博物館
10	昭和62年度	立会	佐倉市教育委員会		
11	昭和58年度	立会(盛崩れ)	佐倉市教育委員会		
12	平成5年9月1日～ 10月29日	600㎡	助印旛郡市文化財センター	天神曲輪	1996「千葉県佐倉市佐倉城跡」佐倉市・助印旛郡市文化財センター
13	平成5年10月	立会	助印旛郡市文化財センター	天神曲輪	
14	平成8年8月19日～ 10月25日	2,208㎡	助印旛郡市文化財センター	天神曲輪	2001「佐倉城跡（天神曲輪）」助印旛郡市文化財センター
15	平成9年11月5日～ 11月11日	3,267㎡	助印旛郡市文化財センター	三味線囃～鷹匠 地区	1999「助印旛郡市文化財センター年報14」
16	平成9年4月3日～ 4月21日	50㎡	助千葉県文化財センター	中下町	1998「佐倉市佐倉城跡」助千葉県文化財センター
17	平成16年4月5日～ 4月28日	667㎡	助千葉県文化財センター	中下町	本報告書

ンターが鷹匠地区の確認調査を行っている。そして、歴博建設関連の調査を行ってきた（財）千葉県文化財センターは16次で県立佐倉高等学校の部室建替に伴う調査を行った。今回の調査は、同高等学校の男女共学化事業の一環の格技場新築工事に伴う調査で、17次調査となる。

詳細は第2表の「報告書」欄に示した参考文献に詳しいので、紹介することで留めたい。それ以外の参考文献は下記に記載する。

参考文献

※1966「佐倉城の歴史」、1981「佐倉の歴史」 篠丸頼彦

※1997「城から兵營へ」佐倉市史研究第11号 塚本 学

II 検出された遺構と遺物

1 検出遺構

(1) 遺構の概要 (第7図, 写真図版2-2, 3)

発掘調査の状況については、「1 調査の概要 (2) 調査の方法」で前述した。ここではこのような状況下で検出された遺構について、概略を記すこととする。

検出された遺構は、建物柱跡、土坑、ピット状遺構の3種類に分けられる。

建物柱跡 (第7図網掛け部分) は24基検出された。そのうち実際に調査できたものは16基で、残りの8基については埋め戻し直前に重機で拡張して検出した。落壁の危険性があったので、写真撮影で位置と覆土の状況 (柱跡3のみ) を確認するに留めた (写真図版6の5, 6)。平面形は統一性が見られず、深さは約20cm前後のものがほとんどである。柱跡の覆土は全て黒色土を主体とし、若干の粘土又はロームブロックが混入されている。覆土のしまりはほとんどが特に固くしまった様子はなく普通であったが、他の柱跡と重なりあうように構築された、柱跡13と柱跡14の2基だけは非常に固くしまっている。

土坑は10基検出された。そのうち1, 2, 4, 5の4基は建物柱跡の覆土と同一であり、建物柱跡と同時期と考えられる。残りの6基は、覆土が暗褐色もしくは暗黄褐色でしまりは良く、時期は建物柱跡以前と考えられる。

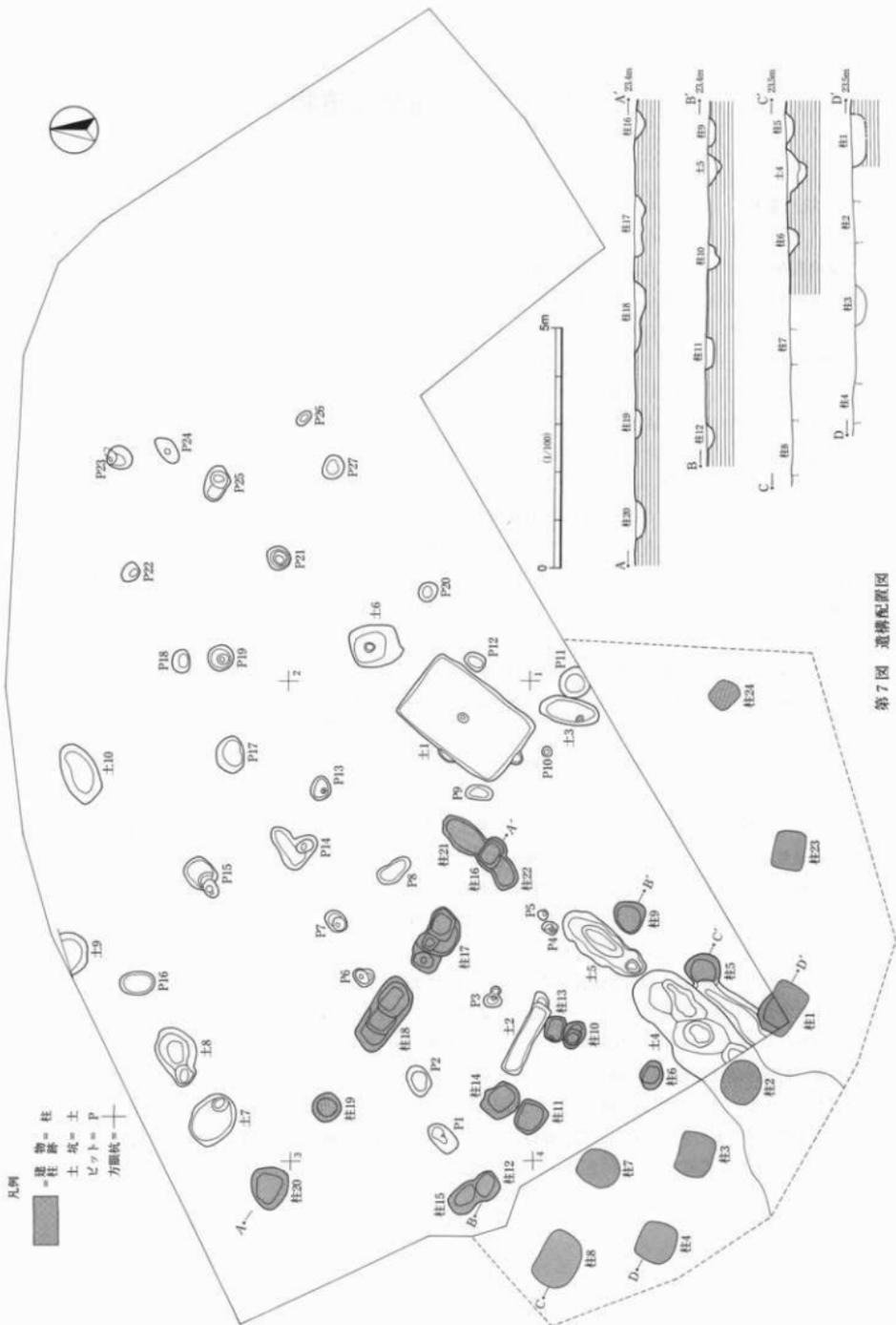
ピット状遺構は27基検出された。平面形は楕円形もしくは円形のものが多いがほとんどで、覆土も暗褐色もしくは暗黄褐色でしまりは良く、時期は建物柱跡以前と考えられる。ただしP8とP11の覆土は建物柱跡の覆土とはほぼ同一でしまりは普通であるため、建物柱跡と同時期と考えられる。

(2) 建物柱跡 (第7図, 第3表, 写真図版4)

建物柱跡と思われる遺構は、前述したとおり、24基検出された。覆土はほとんど一層で、分層できなかった。黒色土を主体とし、粘土、ロームブロック、焼土が単独または混在するものに分かれる。礎石や根石痕等は発見できなかったが、覆土除去後の底面は固くしまっていた。覆土中から遺物を出したものは、柱9と柱16でそれぞれ2点、柱17で6点で、いずれもカワラケの小片で図示できるものはなかった。直列するものは24基中17基で、柱1～柱4 (D-D'), 柱5～柱8 (C-C'), 柱9～柱12 (B-B'), 柱16～柱20 (A-A') の4列認められる。軸線方位はいずれもN-56°～64°-Wの範囲で、若干のズレはあるものの、ほぼ平行である。この向きは広小路にほぼ平行である。平面形は第3表に示したとおりであるが、4列それぞれの柱跡の間隔 (中心から中心までの距離) は、約2mを測る。建物の柱跡が全て検出された訳ではないが、第7図で示した柱跡のセクション図を建物の桁行と考えた場合、A-A'の柱跡とB-B'の柱跡の桁行間隔はともに等間隔で対応するが、梁行間隔は、最小で3.2m、最大で3.9mあり、北西に行くにしたがい広がる。B-B'の柱跡とC-C'の柱跡は桁行・梁行ともに等間隔で対応する。D-D'の柱跡の桁行間隔だけは他のものと対応していない。セクション図として掲載はしていないが、柱1・柱5・柱9・柱16は平面的に直列する。柱9と柱16の間隔は3.2mあり、他の柱の間隔2mよりも1.2mも長くなっている。

凡例

- 建物 = 柱
- 柱跡 = 土
- 土坑 = 土
- ビット = P
- ⊕ 方眼杭 = ⊕



第7図 遺構配置図

第3表 建物柱跡観察表

[] は推定値

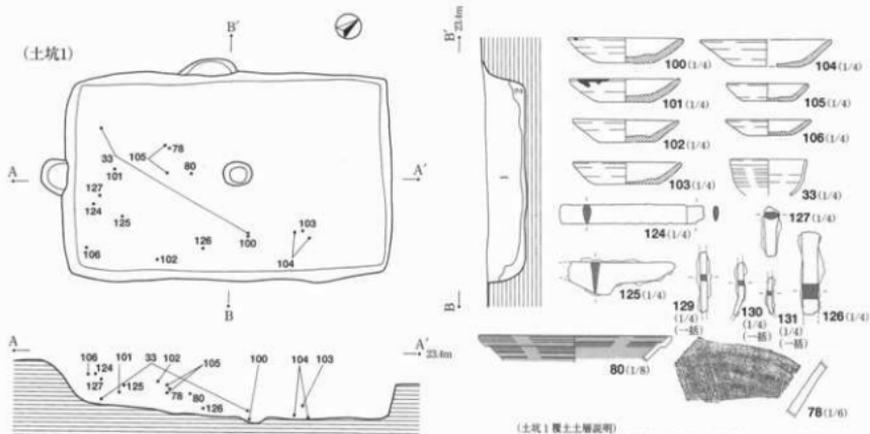
遺構番号	平面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	覆土・状況(しまり)	備考	軸線方位
柱跡1	隅丸長方形	110	80	[30]	黒色土+粘土(普通)	終了後検出	N-62°-W
柱跡2	楕円形	90	80	-	黒色土+粘土(普通)	終了後検出	
柱跡3	隅丸長方形	95	72	25	黒色土+ロームブロック(普通)	終了後検出	
柱跡4	隅丸長方形	88	80	-	黒色土+ロームブロック(普通)	終了後検出	
柱跡5	円形	80	[70]	19	黒色土+粘土(普通)		N-64°-W
柱跡6	楕円形	60	58	22	黒色土+ロームブロック(普通)		
柱跡7	円形	86	80	-	黒色土+ロームブロック(普通)	終了後検出	
柱跡8	隅丸長方形	116	84	-	黒色土+ロームブロック(普通)	終了後検出	
柱跡9	円形	65	65	12	黒色土+粘土+焼土(普通)		N-62°-W
柱跡10	楕円形	61	45	25	黒色土+粘土(普通)		
柱跡11	隅丸長方形	70	60	20	黒色土+ロームブロック(普通)		
柱跡12	円形	65	55	15	黒色土+ロームブロック(普通)		
柱跡13	楕円形	54	40	14	黒色土+粘土(強)		N-56°-W
柱跡14	隅丸長方形	79	62	16	黒色土+粘土(強)		
柱跡15	楕円形	62	52	17	黒褐色土+ローム粒(普通)		
柱跡16	隅丸長方形	69	45	20	黒色土+粘土+焼土(普通)		
柱跡17	不整形	140	70	21	黒褐色土+ローム粒(普通)		
柱跡18	隅丸長方形	165	70	25	黒色土+粘土+焼土(普通)		
柱跡19	円形	60	59	12	黒褐色土+ローム粒(普通)		
柱跡20	不整形	85	82	20	黒褐色土+ローム粒(普通)		
柱跡21	楕円形	95	60	18	黒色土+粘土(普通)		終了後検出
柱跡22	楕円形	60	50	15	黒色土+粘土(普通)		
柱跡23	隅丸長方形	80	65	-	黒色土+粘土+焼土(普通)		
柱跡24	隅丸長方形	61	51	-	黒色土+粘土+焼土(普通)		

調査区南側に一連の柱跡から若干離れて位置する柱23と柱24は、安全上位置だけを確認したもので、覆土の状況が他の柱跡と同一であったので、柱跡とした。建物柱跡としてどのように繋がっていくのかは不明である。しかし、柱24は柱9～柱12(B-B')の延長上5m隔てた位置にある。いずれにしても、この建物柱跡は調査区の西側に繋がっていくことには違いはないと思われる。

(3) 土坑(第7, 8, 9図, 第4表, 写真図版5, 6)

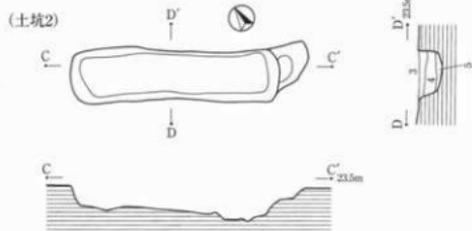
土坑は10基検出された。前述したように建物柱跡と同一時期と思われるものは4基で、残りの6基については、建物柱跡以前に構築されたものと思われる。覆土中から遺物が出土した土坑は、土坑1・2・4・5の4基である。

1は建物柱跡(柱16)から北東へ約2m離れたところに位置し、長辺2.75m、短辺1.77mの長方形を呈する。深さは最深で0.55mを測る。北と南の壁中央部には半円状の浅い掘りこみが見られ、底面中央部には径20cm、深さ5cmのほぼ円形の落ち込みがあり、いずれも本土坑に伴うものである。屋根状の上部構造がある可能性も考えられたので周辺を精査したが、それらしき遺構は検出されなかった。覆土は二層に分層できたが、ほとんどが建物柱跡の覆土と同一の黒色土を主体としたものであった。このことにより、本土坑は建物柱跡とほぼ同時期に、短期間のうちに埋もれたものと思われる。遺物はカワラケ・陶磁器・須恵器・瓦・鉄製品・石等の小片が出土したが、図示できた遺物は17点のみであった(第8図)。内訳は、在地的のカワラケ灯明受皿7点、瀬戸・美濃産陶器碗1点と播鉢2点、銅製品の小柄1点、鉄製品では小刀1



(土坑1 覆土土層説明)

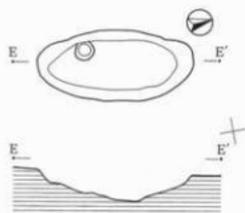
1. 黒褐色—ローム砂、炭化粒、焼土粒、少量散在、しまりは普通
2. 黒色—強い粗粒があり、固くしまっている



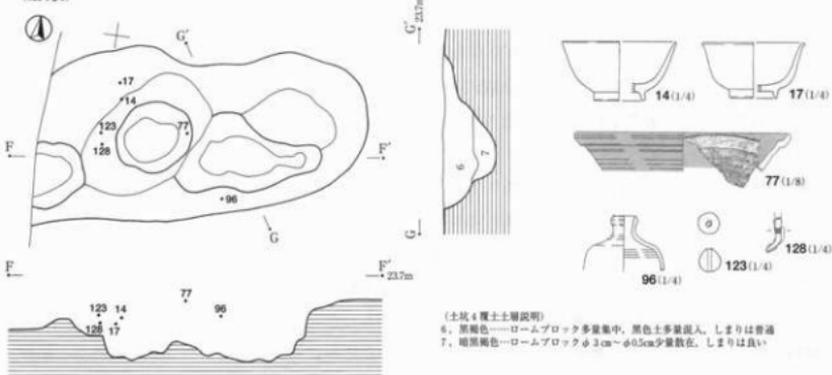
(土坑2 覆土土層説明)

3. 暗黒褐色— ϕ 3cmロームブロック多量、若干の黒色土混入、しまりは普通
4. 黒褐色—ローム砂—砂粒多量混入
5. 明黒褐色—ローム砂、炭化に部分集中、しまりはない

(土坑3)



(土坑4)



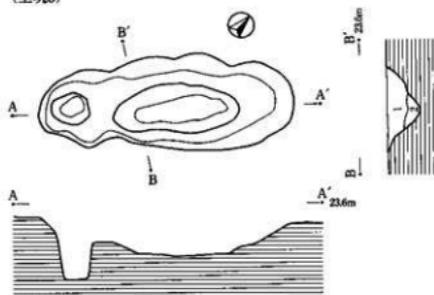
(土坑4 覆土土層説明)

6. 黒褐色—ロームブロック多量集中、黒色土多量混入、しまりは普通
7. 暗黒褐色—ロームブロック ϕ 3cm— ϕ 0.5cm少量散在、しまりは良い

0 (1/40) 2m

第8図 土坑実測図①

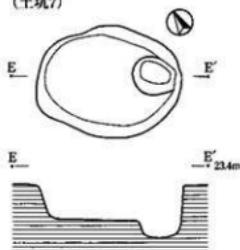
(土坑5)



(土坑5埋土層説明)

1. 暗黒褐色……φ1cmロームブロック少量混入。粘土層、微土粒少量混入。しまりは普通
2. 暗褐色……ローム粒多量、黒色土・焼土粒少量混入

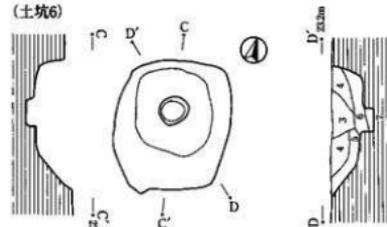
(土坑7)



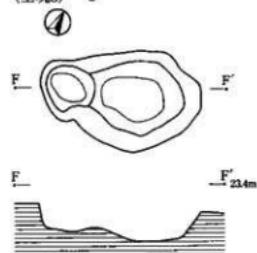
(土坑7埋土層説明)

3. 暗褐色……ローム粒少量散在。しまりは良い
4. 暗褐色……ローム粒多量、砂粒少量散在
5. 暗褐色……4層より砂粒やや多い
6. 暗褐色……φ4mmロームブロック多量混入。しまりは良い
7. 黄褐色……ロームブロック(小粒)、ローム粒、砂粒多量混入。しまりは良い

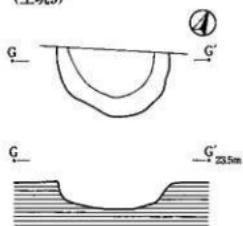
(土坑6)



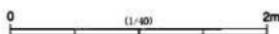
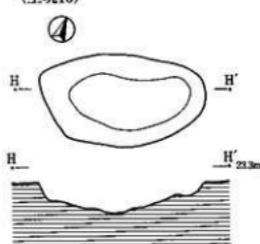
(土坑8)



(土坑9)



(土坑10)



第9図 土坑実測図②

第4表 土坑観察表

[] は推定値

遺構番号	平面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	覆土・状況(しまり)	時期	性格	備考
土坑1	長方形	275	177	55	黒色土+粘土(普通)	建物同期	廃棄場	
土坑2	長方形	186	50	28	黒色土+粘土(普通)	建物同期		
土坑3	楕円形	123	56	25	暗褐色(良)	建物以前		
土坑4	楕円形	[254]	[162]	50	黒色土+粘土+焼土(普通)	建物同期	廃棄場?	
土坑5	楕円形	200	85	50	黒色土+ロームブロック(普通)	建物同期	廃棄場?	
土坑6	不整形	113	90	35	暗褐色(良)	建物以前		
土坑7	楕円形	113	90	42	暗黄褐色(良)	建物以前		
土坑8	不整形	125	80	30	暗黄褐色(良)	建物以前		
土坑9	[円形]	[80]	[55]	22	暗褐色(良)	建物以前		
土坑10	楕円形	136	73	25	暗黄褐色(良)	建物以前		

点、鏝1点、釘3点（一括取り上げ）、不明1点である。

2は建物柱跡内の柱13の北側に接するように位置し、長辺1.86m、短辺0.50mの長方形を呈し、深さは最深で0.28mを測る。底面は若干の凹凸があるが固くしまっている。遺物は覆土上面からカワラケの小片が4点出土したが、いずれも別個体で図示できるものはなかった。

3は土坑1の南0.5mに位置し、長径1.23m、短径0.56mの楕円形を呈し、深さは最深で0.25mを測る。底面はレンズ状を呈し東側に径約13cm、深さ約7cmのピットがみとめられる。覆土は暗褐色を呈しあまりは良く、出土遺物はない。

4は複数の土坑が重なり合った状態の形態をしている。遺物はカワラケ・須恵器・瓦等が出土したが、覆土上面からのものが多く、しかも小片で、図示できた遺物は6点のみである。内訳は瀬戸・美濃の磁器碗2点、陶器插鉢1点、徳利1点、土玉1点、釘1点である。終了時に広がりを見極めるため重機で拡張した際に、未掘部に同一の黒褐色の覆土がのびていたことから、本跡は溝状遺構となる可能性もある。

5は土坑4のすぐ北東側に位置し、長径2.00m、短径0.85mの楕円形を呈し、底面南西隅に深さ20cmの円形のピットがある。覆土は4とほぼ同一で、黒色土を主体としており、遺物はカワラケの小片が2点出土したが、いずれも別個体で図示できるものはなかった。

6は土坑1の北東側に位置し、不整形で底面中央部に径約20cm、深さ約10cmのピットがある。覆土は全体的に暗褐色であまりは良く、出土遺物はない。

7は建物柱跡20の北東側約1m隔てて位置し、長径1.13m、短径0.90mの楕円形を呈し、底面は平らで、南東隅に径約17cm、深さ約7cmの円形のピットがある。覆土は全体的に暗黄褐色であまりは良く、出土遺物はない。

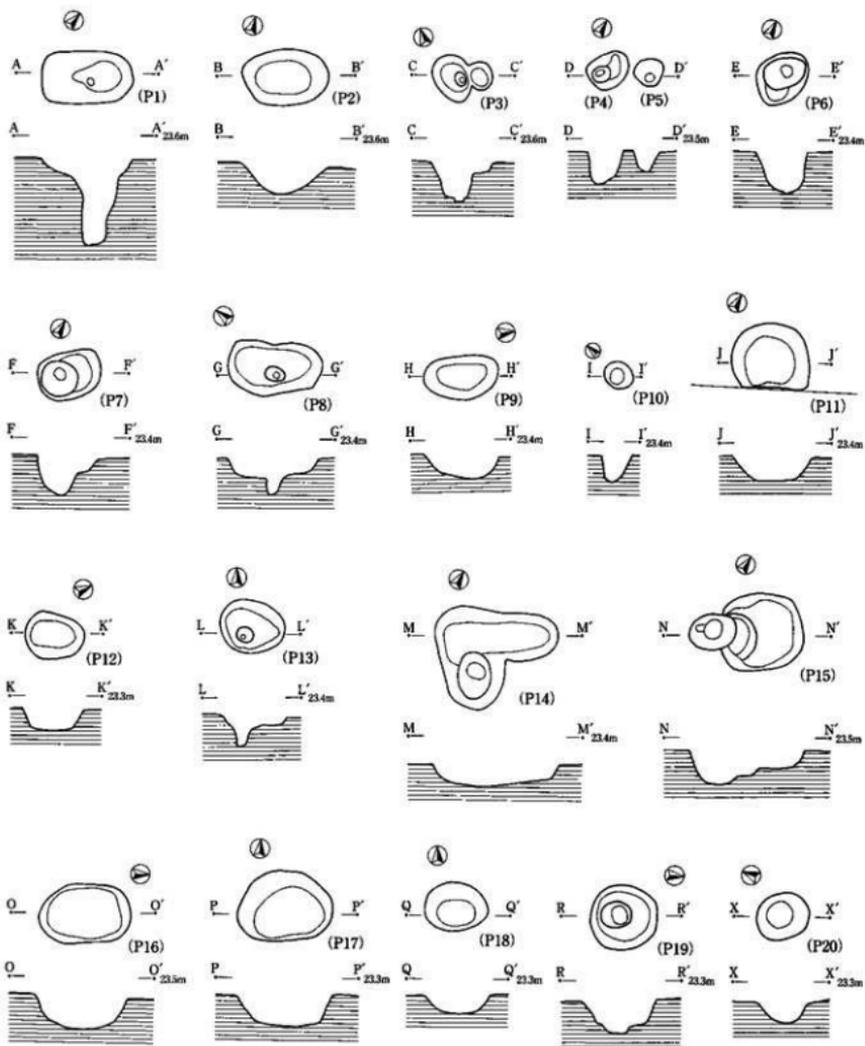
8は土坑7の北東側約0.50m隔てて位置し、長径1.25m、短径0.80mの不正形を呈し、深さは最深で0.3mを測る。底面は凹凸が目立ち、覆土は全体的に暗黄褐色であまりは良く、出土遺物はない。

9は北側壁面下に半分のみ検出された。壁崩落の恐れがあったため、完掘することができなかった。平面形態は円形と思われる。覆土は全体的に暗褐色であまりは良く、出土遺物はない。

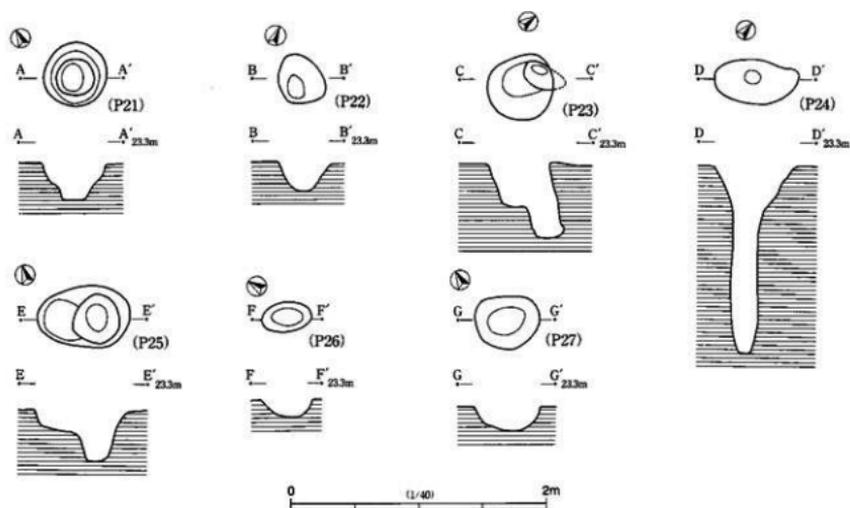
10は調査区北側中央部に位置し、長径1.36m、短径0.73mの楕円形を呈し、深さは最深で0.25mを測る。底面はレンズ状を呈し、若干の凹凸が目立ち、覆土は全体的に暗黄褐色であまりは良く、出土遺物はない。

（4）ピット状遺構（第7、10、11図、第5表）

ここでは、柱穴や性格不明の浅いレンズ状の遺構も含めて、ピット状遺構と総称して取り扱うこととする。このようなピット状遺構は計27基検出された。そのうち黒色土を主体とする覆土の状況から、建物柱跡と同時期と思われるものは、P8・P11の2基である。それ以外のもは、暗褐色及び暗黄褐色を主体とした覆土であまりも良く、建物柱跡以前の時期に比定できる。柱穴と思われるものは、P1・P3・P4・P6・P10・P21・P23・P24の8基で、特にP24については、深さが1.48mもある。ピット状遺構の中で、P1・P2・P6・P7・P14・P17・P18・P22は、南西から北東方向にほぼ直列する。建物柱跡以前に欄列状の何らかの上物があった可能性があるが、覆土の状況及び底面がレンズ状で浅いものもあり、確証はつかめなかった。他のピット状遺構も上物等の可能性は不明である。また、これらの遺構からの出土遺物は全くない。



第10図 ビット状遺構実測図①



第11図 ビット状遺構実測図②

第5表 ビット状遺構観察表

[] は推定値

遺構番号	平面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	覆土	時期	性格	備考
P 1	楕円形	72	42	67	暗褐色	建物以前	柱穴	
P 2	楕円形	68	45	26	暗黄褐色	建物以前		
P 3	不整形	48	47	32	暗褐色	建物以前	柱穴	
P 4	円形	34	28	29	暗褐色	建物以前	柱穴	
P 5	円形	23	21	19	暗黄褐色	建物以前		
P 6	不整形	47	36	30	暗黄褐色	建物以前	柱穴	
P 7	楕丸長方形	50	37	32	暗褐色	建物以前		
P 8	楕円形	75	42	31	明黒褐色	建物同期		
P 9	楕円形	58	35	21	暗褐色	建物以前		
P10	円形	13	20	21	暗褐色	建物以前	柱穴	
P11	[円形]	60	[59]	20	明黒褐色	建物同期		
P12	楕円形	46	36	19	暗褐色	建物以前		
P13	楕円形	52	41	26	暗褐色	建物以前		
P14	不整形	96	81	19	暗褐色	建物以前		
P15	不整形	89	59	28	暗褐色	建物以前		
P16	楕円形	72	47	27	暗褐色	建物以前		
P17	楕円形	75	55	24	暗黄褐色	建物以前		
P18	楕円形	50	38	14	暗褐色	建物以前		
P19	円形	52	50	27	暗褐色	建物以前		
P20	円形	43	38	16	暗褐色	建物以前		
P21	円形	49	48	31	暗褐色	建物以前	柱穴	
P22	円形	40	35	26	暗褐色	建物以前		
P23	円形	54	51	57	暗褐色	建物以前	柱穴	
P24	楕円形	66	34	148	暗褐色	建物以前	柱穴	
P25	楕円形	61	60	40	暗褐色	建物以前		
P26	楕円形	40	23	19	暗褐色	建物以前		
P27	楕円形	51	43	19	暗褐色	建物以前		

2 出土遺物

(1) 遺物の概要(第3図, 実測図版1~7, 第6~11表, 写真図版7~17)

出土遺物は、大まかには土師器、須恵器、磁器、陶器、カワラケ、土師質土器、瓦製品、金属製品、石製品、土製品である。そのほとんどは、本書(1調査の概要(1)調査の方法)で「埋土1」「埋土2」と呼称している、いわゆる攪乱層から出土している。土師器と須恵器も出土しているが、全て攪乱層からで、摩耗が著しい小片で、図示できたものはない。

遺物は小片でも極力、図示することに努めたが、図示できた遺物は計138点に留まった。そのうち遺構に伴って出土した遺物は23点で、土坑1の17点、土坑4の6点、残りの115点が「埋土1」「埋土2」からの出土である。内訳は、磁器63点、陶器41点、カワラケ8点、土師質土器4点、瓦製品6点、金属製品12点、石製品3点、土製品1点である。

図示できなかったが、遺物が出土した遺構は、建物柱跡9(2点)、建物柱跡16(2点)、建物柱跡17(6点)、土坑2(4点)、土坑5(2点)で、いずれも摩耗したカワラケの小片であった。

陶磁器の年代は19世紀代が主体で、なかには14世紀代の常滑大瓶、15世紀後半~16世紀前半の摺鉢、16世紀後半の天目茶碗が含まれている。また、生産地は「瀬戸・美濃」系、「肥前」系、を主体に「信楽」系、「堺」系と続く。詳しくは第6表「出土陶磁器観察表」に記載した。また、遺物は全て通し番号で、実測図は実測図版として写真図版と対応するように図版ページに掲載した。

(2) 陶磁器(実測図版1~6, 第6表, 写真図版7~16)

出土陶磁器を器種別に見ると、碗類(端反碗・丸碗・筒碗・広東茶碗・くらわんか茶碗・半球碗・せんじ茶碗・天目茶碗)、碗蓋、皿、盃、猪口、鉢、水瓶、土鍋、摺鉢、青花磁瓶・徳利・乗獨・灯明受皿・油皿等があげられる。

1~5は染付の磁器碗蓋で、1~3は内外面及び見込み圏線内にそれぞれ呉須文様が配されている。4は見込み圏線は配されていない。5は外面のみに呉須文様が認められる。1, 4が肥前産で19世紀前半、2, 3は瀬戸・美濃産で19世紀前半から中葉、5は瀬戸・美濃産で19世紀前半である。

6~28は染付の磁器碗である。6, 8, 9, 14, 15, 19, 21, 22, 27は口縁部がやや外反する端反碗で、15は肥前産で19世紀前半、21は瀬戸・美濃産で19世紀前半、6, 8, 9, 14, 19, 22, 27は瀬戸・美濃産で19世紀前半から中葉である。14は土坑4からの出土である。12, 26は口縁部が大きく外反する端反碗で、瀬戸・美濃産で19世紀前半から中葉である。7は底部から口縁部まで急に立ち上がり、外面全面に呉須文様が配されるやや大きめの碗で、肥前産で19世紀前半である。10は筒茶碗で、底部から口縁部までやや内傾気味に立ち上がる。11は飯茶碗で口縁部がやや外反気味に立ち上がる。10, 11ともに肥前産で18世紀後半から19世紀前半である。13は丸みを帯びた底部から口縁部まで直線的に立ち上がり、外面は瓢箪寿文に馬の呉須文様、内面は口唇部に雷文が配され、焼き雑ざりが認められる。肥前産で18世紀末である。16, 17, 20, 23, 24は瀬戸・美濃産の小碗で19世紀前半から中葉である。18は丸みを帯びた底部から口縁部まで直線的に立ち上がり、高台糸底が外側にカットされている。瀬戸・美濃産で19世紀前半から中葉である。25, 28は肥前産の丸碗で、18世紀後半から19世紀前半である。

29は瀬戸・美濃産の染付の磁器盃で、外面に菊花文と扇文を配している。19世紀中葉である。

30~37は染付の磁器碗である。30は瀬戸・美濃産の小碗で、19世紀中葉である。31は小片のため全体の

器形ははっきりつかめないが、底部からの立ち上がりから丸碗と思われる。胎土は灰色で荒く産地は不明である。時期は19世紀代と思われる。32, 35, 36は肥前産の広東茶碗で、35, 36には胎土に黒斑が目立つ。いずれも19世紀中葉である。33は土坑1出土の碗で、外面は灰釉と鉄釉の掛け分け、内面は全面灰釉が施され、瀬戸・美濃産で18世紀後半である。34は肥前産のくらわんか茶碗で、18世紀代である。37は白磁の丸碗と思われ、産地は不明であるが時期は19世紀代である。

38～42は陶器の碗である。38, 40は信楽産の半球碗で、38の外面には灰色と銀色の鳥羽文のような絵付が配され、時期は18世紀後半である。40の外面には染付の樹枝文が配され、時期は18世紀代である。39は信楽産の茶碗で外面には染付の山水文が配され、時期は18世紀前半である。41は瀬戸・美濃産のせんじ茶碗で、胴部中位でやや窪み指頭による押圧痕が二箇所で見られる。時期は18世紀中葉である。42は瀬戸・美濃産の天目茶碗で、内面全体から外面中位にかけて胎釉が施され、時期は16世紀後半である。

43は肥前産の染付の磁器碗で、内外面の口唇部に染付の一輪の菊花文が配され、時期は19世紀前半である。

44, 45は肥前産の染付の磁器蕎麦猪口である。44が19世紀前半で、45が18世紀後半から19世紀前半である。

46は完形の磁器盃で高台内面を除き全面に釉が施され、内外面には細かな貫入があり、志野産の特徴を持つ。また、高台糸底が外側にカットされており、時期は19世紀代である。

47, 48は完形の磁器鍋猪口でいずれも作りは雑である。47は内外面全面に釉が施され、内面見込み周辺に焼成時の軸塊が付着し、高台糸底が外側に若干カットされている。48は平らな口縁部を除き全面に釉が施され、内面見込みは中央部で若干盛り上がる。いずれも19世紀代で産地は不明である。

49～51は磁器小杯で、49, 50は染付の肥前産で51は産地不明である。49は外面に算木文、内面には見込み圏線が配され、時期は18世紀後半である。50は胴部外面に波線連続文、高台外面に雷文が配され、内面には具須文様はなく、時期は19世紀前半である。51は小さめの底部から緩やかに立ち上がり口縁部は大きく開き、内外面ともに具須文様はなく、時期は19世紀代で産地は不明である。

52, 53は肥前産の染付の磁器重である。52は盃で、外面に海・島・帆船の風景文が円内部に配されている。53は身で、低めの高台と重ね合わせ部が設けられ、外面には具須文様の一部が若干認められる。時期はいずれも19世紀前半である。

54, 55, 59, 60, 62は肥前産の染付の磁器大皿である。54は外面に唐草文、内面に蛸唐草文が配され、見込み圏線内に草花文の一部が認められる。55は外面に具須文様の一部が認められ、内面見込み圏線内に花文が配されている。時期はいずれも19世紀前半である。59は外面に唐草文、内面に蛸唐草文が配され、時期は19世紀前半から中葉である。60は見込みの一部分で、内面に人物風景文が描かれ、時期は18世紀後半から19世紀前半である。62は外面に唐草文、内面に草花文に扇が配され、時期は18世紀後半から19世紀前半である。

56は肥前産の染付の磁器大碗で、外面に草花文、高台内部中央に渦巻文が、内面見込み圏線内に五弁花文が配されている。時期は19世紀前半である。

57, 58は染付の磁器小皿である。57は肥前産で波状口縁を呈し口唇部に鉄釉が施され、内面に風景文が配されている。時期は18世紀後半から19世紀前半である。58は瀬戸・美濃産で形状、鉄釉も57同様で、内面に草花文の一部が認められる。時期は19世紀前半から中葉である。

61は瀬戸・美濃産の陶器鉢で、内面から外面中位に灰釉が施されている。時期は18世紀代である。

63は肥前産の染付の型打ち成型磁器鉢で、外面に幾何学文、内面に松枝・竹葉・月下樹木文、見込み圏線内に日の出鶴文が配されている。時期は18世紀後半から19世紀前半である。

64～67は陶器の水瓶で、67は産地不明であるがそれ以外は瀬戸・美濃産である。64は外面に曲線文の線彫り後、内外面に灰釉を、また、高台内には鉄釉を施している。時期は19世紀中葉である。65は曲線文の線彫りは見られず、内外面に灰釉を施しその後、口縁部から緑釉を流し掛けしている。時期は18世紀後半から19世紀前半である。66は外面に曲線文の線彫り後、内外面に灰釉を施しその後、緑釉と鉄釉を部分的に流し掛けしている。時期は18世紀後半から19世紀前半である。67は外面口唇部に指頭による押圧が、胴部に曲線文の線彫りが施されている。時期は19世紀代である。

68は14世紀代の常滑大瓶の口縁部破片である。

70は陶器の土鍋で、鉄釉を内面全体及び外面底部周辺部にまで厚く施しており、鉄釉が施されない底部は煤が付着している。時期は19世紀代で産地は不明である。

72～80は摺鉢である。72～76は18世紀代堺産の陶器摺鉢である。77～80は瀬戸・美濃産の陶器摺鉢である。77は土坑4の覆土上面から出土した口縁部片で、先端が大きく外反し受口状を呈し、内外面に丹念な鉄釉が施されている。時期は17世紀後半である。78、80は土坑1の覆土中面から出土したもので、いずれも時期は17世紀代であるが、80は口縁部の状況から17世紀後半の可能性もある。79は底部片で内面の摺目は摩耗が激しく、かなり使い込まれている。底部外面は回転糸切り痕があり、時期は17世紀代である。

81は円形の染付磁器蓋で、何に使用された蓋であるか不明である。外面全面に呉須渦巻き文が施され、均等に六つの草文が配されている。時期は呉須文様から19世紀代と思われる。

83は瀬戸・美濃産の染付磁器レンゲで、手持部はほぼ垂直に立ち上がる。時期は19世紀前半～中葉である。

84は器種・時期不明の陶器胴部片であるが、復元実測によると小壺の可能性もある。

85は陶器お歯黒壺の蓋で、合口蓋受部は丸みを帯びお歯黒が付着している。産地は不明で時期は19世紀代と思われる。

87～89は産地不明の19世紀代の青磁である。87は花瓶の把手の部分で、両外面に六つの点文が施されている。88は口縁部から肩部にかけての花瓶片で、肩部に対称に羽を広げた小鳥が配されている。89は口縁波状の小皿で、高台糸底が外側にカットされている。

90～93は19世紀代の陶器土瓶である。90は器厚が2mm前後と薄く、外面には白色地に焦げ茶色の笹文及び漢字福文が染付されている。産地は不明である。91は土瓶蓋で、つまみは窪み中央に配され、見込みは若干窪む。外面には銅緑釉が施され、産地は東北産の可能性もある。92は注口部から口縁部にかけて残存する。注口胴部に接する部分には径7mm～9mmの円形の穴が二つたがたれている。産地は不明である。93は注口部のみ破片で、胴部に接する部分には径7mmの円形の穴が二つたがたれている。産地は東北産の可能性もある。

94～98は徳利で、94のみが肥前産の染付磁器で残りの95～98は瀬戸・美濃産の陶器である。94は細長い頸部片で外面には蛸唐草文が密に施され、内面には口縁部からたれた釉が部分的に見られる。時期は18世紀後半から19世紀後半である。95は口縁部片で外面全体及び内面口縁部周縁に鉛釉が施され、外面口縁部には一段の稜がある。時期は19世紀前半である。96は短い頸部に大きく肩の張るやや大ぶりのもので、土

坑4の覆土上面から出土した。口縁部には大きめの一段の稜があり口唇部は尖っている。外面は灰釉が施され、内面肩部にまで及んでいる。時期は19世紀前半である。97は底部から胴部にかけての破片で、外面には灰釉が底部周縁まで施され、胴部内面上端にも一部たれている。底部内面中央は若干盛り上がり、外面は回転ヘラケズリで微妙な高台をもっている。時期は19世紀前半である。98は肩部から胴部下位にかけての破片で、肩部が若干張ったやや大ぶりのものである。97同様外面には灰釉が底部周縁まで施され、内面には部分的にたれている。時期は19世紀中葉である。

99は瀬戸・美濃産の陶器浅瓶で、把手を欠損する以外はほぼ完形である。外面には灰釉が底部周縁まで施され、口縁部内面にまで及ぶ。欠損する把手部分には線刻文が施されている。時期は19世紀代である。

108～116は19世紀前半の陶器の灯火具である。108は信楽産の乗獨で、脚部底面を除いて全面施釉が施されている。受皿の稜は口縁部より若干低く、油溝はやや浅い。脚高は5cmで、底部周縁は斜めにカットされている。109は瀬戸・美濃産油皿の完形品である。底部外面は回転ヘラケズリで、内面に鉄軸を二度掛けし、外面には鉄軸拭き取り後流し掛けが施されている。110は瀬戸・美濃産の灯明受皿で、若干の欠損はあるものの完形に近い。底部外面は回転ヘラケズリで、口縁部へ緩やかに立ち上がる。受皿の油溝はやや深めで、稜は口縁部とほぼ同じ高さである。内面には鉄軸を二度掛けし、外面には鉄軸拭き取り後流し掛けが施されている。111は瀬戸・美濃産の灯明受皿で、ほぼ完形品である。底部外面は回転ヘラケズリで、口縁部へ緩やかに立ち上がる。受皿の油溝は深く広めで、稜は口縁部より低い。内面には鉄軸を二度掛けし、外面には鉄軸拭き取り後流し掛けが施されている。112は瀬戸・美濃産の灯明受皿で、完形品である。底部外面は回転ヘラケズリで、口縁部へ緩やかに立ち上がる。受皿の油溝はやや深めで、稜は口縁部より低い。内面には丁寧に鉄軸が二度掛けされ、外面には鉄軸拭き取り後流し掛けが施されている。113は信楽産の油皿で、ほぼ三分の二を欠損し内外面ともに薄く油煙が付着している。底部外面は回転ヘラケズリで、口縁部へ緩やかに立ち上がる。内面全体及び外面口唇部まで施釉されている。114は瀬戸・美濃産の灯明受皿で、ほぼ半分を欠損する。底部外面は回転ヘラケズリで、口縁部へ緩やかに立ち上がる。受皿の油溝はやや深めで、稜は口縁部より若干低い。内面には鉄軸を雑に二度掛けし、外面は鉄軸を拭き取り流し掛けは施されていない。115は瀬戸・美濃産の灯明受皿で、ほぼ三分の二を欠損する。底部外面は回転ヘラケズリで、口縁部へ緩やかに立ち上がる。受皿の油溝はやや浅めで、稜は口縁部より低い。内面には鉄軸を丁寧に二度掛けし、外面には鉄軸拭き取り後流し掛けが施されている。116は瀬戸・美濃産の油皿片で、底部外面は回転ヘラケズリで、口縁部へ緩やかに立ち上がる。内面には鉄軸を均一に二度掛けし、外面には鉄軸拭き取りが中位までおよび、拭き取り後の流し掛けは施されていない。

(3) 土師質土器・在地系土器 (実測図版4・6, 第7表, 写真図版14・16)

69は土師質土器のいわゆる行平鍋で、口縁部は蓋を受けるために受口状の口縁を呈している。外面は黒色、内面は透明の釉が掛けられ、19世紀代で産地は不明である。

71は中世の土器播鉢胴部片で摺目は細く浅い。時期は15世紀後半から16世紀前半で産地は不明である。82は土師質土器の焼塼壺の蓋で、ほぼ完形である。天井部からやや内傾気味の縁にかけてはロクロナデが施され、見込みには布目痕がある。時期は18世紀代である。

86は土師質土器の火鉢の破片である。内外面には粗目の白色塗りが施され、外面には花文と銘款が押圧されている。時期は18世紀代だと思われる。

第6表 出土陶磁器観察表

[] は推定値又は残存値

発掘 図版	番号	遺物 番号	種類	器種	生産地	年代	法量(cm)			胎土	遺存 (%)	写真 図版	特 徴	
							口径	器高	底径					
1	1	埋土2	一括	磁器	碗蓋	肥前	18C前半	9.0	2.5	3.8	灰白色	100	7	胎付、外蓋草花文、つまみ内縁部、内面口唇部に連続線文。見込み器縁内に草文
1	2	埋土1	一括	磁器	施反碗蓋	瀬戸・美濃	18C前半～ 中葉	9.3	2.9	3.9	白色	90	7	胎付、外蓋草文及び菊文、内面口唇部に呉須見込み器縁内に草文
1	3	埋土2	一括	磁器	碗蓋	瀬戸・美濃	18C前半～ 中葉	[9.6]	4.0	2.9	白色	50	7	胎付、外蓋草花文及び菊文、つまみ内〔〇〇年製〕、内面口唇部に西方文字。見込み器縁内に草文
1	4	埋土2	一括	磁器	施反碗蓋	肥前	18C前半	[9.4]	2.9	[4.1]	灰白色	40	7	胎付、外蓋文及び菊文、内面口唇部に草文、見込みに松文
1	5	埋土2	一括	磁器	碗蓋	瀬戸・美濃	18C前半	-	-	[3.4]	白色	50	8	胎付、外蓋草文
1	6	埋土2	一括	磁器	施反碗	瀬戸・美濃	18C前半～ 中葉	10.3	6.0	3.8	白色	80	8	胎付、外蓋線文、内面口唇部に草文。見込み器縁内に連続草木文
1	7	埋土2	一括	磁器	碗	肥前	18C前半	10.6	7.9	4.1	灰白色	80	8	胎付、外蓋草文。見込み器縁内に花文、胎土に黒墨目立つ
1	8	埋土2	一括	磁器	施反小碗	瀬戸・美濃	18C前半～ 中葉	8.6	4.0	3.8	白色	100	8	胎付、外蓋草文、内面口唇部に草文。見込み器縁内に黒墨化された呉須、高台内縁に黒線
1	9	埋土2	一括	磁器	施反碗	瀬戸・美濃	18C前半 中葉	9.2	5.0	4.1	黄白色	80	8	胎付、外蓋一目測目文、内面口唇部に呉須。見込み器縁内に湯草文
1	10	埋土2	一括	磁器	碗蓋	肥前	18C後半～ 18C前半	7.2	5.4	3.4	灰白色	80	8	胎付、外蓋草文、内面口唇部に連続線文。見込み器縁内に五弁草文。胎土に黒墨目立つ
1	11	埋土2	一括	磁器	碗	肥前	18C後半～ 18C前半	10.4	6.1	4.0	灰色	50	8	胎付、外蓋一目測目文と曲線文を交互に施す。内面口唇部に交差文。見込み器縁内に草花文立つ。胎土に黒墨目立つ
1	12	埋土2	一括	磁器	施反碗	瀬戸・美濃	18C前半～ 中葉	9.7	4.85	3.6	白色	50	8	胎付、外蓋草花文、内面見込み不明
1	13	埋土1	一括	磁器	碗	肥前	18C末	7.6	7.0	4.2	灰白色	50	8	胎付、外蓋草花文に馬、内面口唇部に草文。黒墨目立つ
2	14	土坑4	7	磁器	施反小碗	瀬戸・美濃	18C前半～ 中葉	9.0	4.6	4.0	白色	40	9	胎付、外蓋外縁風雲文
2	15	埋土1	一括	磁器	施反小碗	肥前	18C前半	9.2	5.0	5.0	灰白色	40	9	胎付、外蓋丸内交差文
2	16	埋土2	一括	磁器	小碗	瀬戸・美濃	18C前半～ 中葉	7.2	5.0	3.4	白色	40	10	胎付、外蓋草花文
2	17	土坑4	8	磁器	小碗	瀬戸・美濃	18C前半～ 中葉	8.0	4.3	3.5	白色	40	9	胎付、外蓋草花文、内面見込み不明
2	18	埋土1	一括	磁器	碗	瀬戸・美濃	18C前半～ 中葉	7.0	6.5	3.0	灰白色	40	9	胎付、外蓋不明、内面口唇部に草文、高台糸縁外縁に黒線、胎土に黒墨目立つ
2	19	埋土2	一括	磁器	施反小碗	瀬戸・美濃	18C前半～ 中葉	8.1	4.3	3.0	灰白色	40	10	胎付、外蓋丸に黒草？と点。内面口唇部に呉須。見込み器縁内に文様有り。胎土に黒墨目立つ
2	20	埋土2	一括	磁器	小碗	瀬戸・美濃	18C中葉	6.9	4.6	3.4	白色	50	9	胎付、外蓋線文、高台外蓋草文、高台内縁線
2	21	埋土2	一括	磁器	施反小碗	瀬戸・美濃	18C前半	9.0	4.95	2.9	灰白色	40	10	胎付、外蓋草花文、内面見込み器縁内に草文
2	22	埋土2	一括	磁器	施反小碗	瀬戸・美濃	18C前半～ 中葉	-	[3.8]	3.8	白色	40	10	胎付、外蓋草花文？、内面見込み草文
2	23	埋土1	一括	磁器	小碗	瀬戸・美濃	18C中葉	-	[3.8]	3.4	白色	30	10	胎付、外蓋草文に竜、動物？、内面見込み草文
2	24	埋土2	一括	磁器	小碗	瀬戸・美濃	18C中葉	-	[3.8]	3.8	白色	30	10	胎付、外蓋草花文、内面見込み器縁内文様不明
2	25	埋土1	一括	磁器	丸碗	肥前	18C後半～ 18C前半	-	[3.9]	4.0	灰白色	40	10	胎付、外蓋一目測目文、胎土に黒墨目立つ
2	26	埋土2	一括	磁器	施反小碗	瀬戸・美濃	18C前半～ 中葉	[9.6]	-	-	黄白色	30	10	胎付、外蓋草花文？、内面口唇部に呉須
2	27	埋土2	一括	磁器	施反小碗	瀬戸・美濃	18C前半～ 中葉	[9.4]	-	-	黄白色	30	10	胎付、外蓋草花文に菊？
2	28	埋土1	一括	磁器	丸小碗	肥前	18C後半～ 18C前半	[9.4]	-	-	灰白色	30	10	胎付、外蓋草文
2	29	埋土1	一括	磁器	蓋	瀬戸・美濃	18C中葉	[6.3]	-	-	白色	40	10	胎付、外蓋草花文と線文
2	30	埋土2	一括	磁器	小碗	瀬戸・美濃	18C中葉	[7.6]	-	-	白色	30	10	胎付、外蓋草文、内面口唇部に白枝連続文
2	31	埋土1	一括	磁器	丸碗？	不明	18C	-	-	3.0	灰色	30	10	胎付、外蓋草花文？
2	32	埋土2	一括	磁器	広葉茶碗	肥前	18C中葉	-	-	[5.6]	灰色	30	10	胎付、見込み器縁内に文様有り
2	33	土坑1	18、26	陶器	碗	瀬戸・美濃	18C後半	[12.0]	-	-	黄灰色	30	10	外蓋矢輪と動物の掛け分け、内蓋矢輪
2	34	埋土2	一括	磁器	くわわんか茶碗	肥前	18C	-	-	[5.6]	灰色	30	10	胎付、外蓋草花文？
2	35	埋土2	一括	磁器	広葉茶碗	肥前	18C中葉	-	-	[5.4]	灰色	30	10	胎付、外蓋草花文？、内面見込み器縁内に文様有り。胎土に黒墨目立つ
2	36	埋土2	一括	磁器	広葉茶碗	肥前	18C中葉	-	-	[6.0]	灰色	30	10	胎付、内面見込み器縁内に文様有り。胎土に黒墨目立つ
2	37	埋土2	一括	磁器	丸碗？	不明	18C	-	-	[5.7]	白色	40	10	白磁

実測 図版	番号	辺境	遺物 番号	種類	器種	牛耳地	年代	法量(cm)			土土	厚 (%)	写真 図版	特 徴
								口徑	器高	底徑				
3	38	埴土1	一括	陶器	半球碗	信楽	18C後半	-	-	[34]	黄灰色	40	11	胎付、外周面有り
3	39	埴土1	一括	陶器	茶碗	信楽	18C前半	[58]	6.8	[5.6]	黄白色	40	11	胎付、外周面有り
3	40	埴土1	一括	陶器	半球碗	信楽	18C	-	-	[38]	黄灰色	30	11	胎付、外周面有り
3	41	埴土1	一括	陶器	中心土碗	瀬戸・美濃	18C中葉	10.8	6.7	4.6	黄灰色	95	11	胴部中央部全面に中央部、指環押圧が2つ 有り
3	42	埴土1	一括	陶器	天目茶碗	瀬戸・美濃	18C後半	[12.1]	6.1	[4.2]	暗褐色	40	11	内面金漆から外周面にかけて胎敷
3	43	埴土1	一括	磁器	鉢	肥前	18C前半	[9.1]	-	-	灰色	40	11	胎付、内周面口唇部に一輪の菊文、胎土に 黒皮目立つ
3	44	埴土2	一括	磁器	蕎麦焼酎	肥前	18C前半	-	-	[6.0]	灰白色	30	12	胎付、外周面草文、内面口唇部に雲形連続文
3	45	埴土2	一括	磁器	蕎麦焼酎	肥前	18C後半～ 19C前半	[8.6]	[5.7]	[6.0]	灰白色	40	11	胎付、外周三段の連続文
3	46	埴土2	一括	磁器	蓋	志野?	19C	6.1	5.2	3.0	藍色	100	12	高台内を除く外内面に貫入有り
3	47	埴土1	一括	磁器	筒箱口	不明	19C	5.2	2.9	3.6	白色	100	11	内面見込みに横切線の胎敷有り
3	48	埴土1	一括	磁器	筒箱口	不明	19C	5.0	2.3	3.4	藍色	100	12	内面見込みに中央部若干盛り上がる
3	49	埴土2	一括	磁器	小杯	肥前	18C後半	[8.0]	3.7	[3.0]	灰色	30	12	胎付、胎土に黒皮目立つ
3	50	埴土2	一括	磁器	小杯	肥前	19C前半	-	-	[3.4]	灰色	30	12	胎付、外周面連続文、高台外周面有、胎土 に黒皮目立つ
3	51	埴土2	一括	磁器	小杯	不明	19C	[5.9]	2.7	[2.4]	灰色	40	12	小きめの底部で口縁部は大きく広がる
3	52	埴土1	一括	磁器	重甕	肥前	18C前半	[13.0]	[2.3]	-	灰白色	40	12	胎付、外周面文内部に魚・鳥・帆船の風刺文
3	53	埴土2	一括	磁器	重甕	肥前	19C前半	[9.0]	-	-	灰白色	20	12	胎付、胎土に黒皮目立つ
3	54	埴土1	一括	磁器	大皿	肥前	19C前半	[21.9]	[3.6]	[14.6]	白色	40	12	胎付、外周面草文、内面横帯草文、見込 み縁部に草文?
3	55	埴土2	一括	磁器	大皿	肥前	19C前半	-	-	8.4	灰白色	40	12	胎付、内面見込み縁内に花文
3	56	埴土2	一括	磁器	大皿	肥前	19C前半	-	-	6.5	灰白色	30	12	胎付、外周面草文、高台中央に渦巻文、見込 み縁内に草文有り
3	57	埴土2	一括	磁器	小皿	肥前	18C後半～ 19C前半	[10.2]	2.9	[6.1]	灰色	40	12	胎付、口縁部風刺状で口唇部に胎敷、内面横 紋文
3	58	埴土1	一括	磁器	小皿	瀬戸・美濃	19C前半～ 中葉	[9.4]	[2.9]	[4.4]	白色	30	12	胎付、口縁部風刺状で口唇部に胎敷、内面草 文?
4	59	埴土1	一括	磁器	大皿	肥前	19C前半～ 中葉	[20.5]	[3.4]	-	白色	30	13	胎付、外周面草文、内面横帯草文
4	60	埴土2	一括	磁器	大皿	肥前	18C後半～ 19C前半	-	-	-	白色	10	13	胎付、内面人物風刺文
4	61	埴土2	一括	陶器	鉢	瀬戸・美濃	18C	23.1	6.1	9.1	黄褐色	60	14	胎敷
4	62	埴土1	一括	磁器	大皿	肥前	18C後半～ 19C前半	[19.8]	-	-	灰白色	30	14	胎付、外周面草文、内面草文花文に輪
4	63	埴土1	一括	磁器	鉢	肥前	18C後半～ 19C前半	[16.0]	6.2	7.7	灰白色	60	14	胎付、型打ち成形、外周面何れも文、内面 底・竹・月・雲文、見込み縁内に日の 風刺文
4	64	埴土2	一括	陶器	水瓶	瀬戸・美濃	19C中葉	[16.8]	-	-	黄褐色	40	14	胎敷文を被覆り後、胎敷を施し、高台内周 面に胎敷
4	65	埴土1	一括	陶器	水瓶	瀬戸・美濃	18C後半～ 19C前半	-	-	-	黄褐色	20	14	胎敷文を被覆り後、胎敷を施し、高台内周 面に胎敷
4	66	埴土2	一括	陶器	水瓶	瀬戸・美濃	18C後半～ 19C前半	-	-	-	黄褐色	20	14	胎敷文を被覆り後、胎敷を施し、高台内周 面に胎敷
4	67	埴土3	一括	陶器	水瓶	不明	19C	-	-	-	暗褐色	20	14	外周口唇部に指環押圧が施され、胴部に胎敷 文の胎敷有り
4	68	埴土1	一括	陶器	大瓶	常陸	14C	-	-	-	暗褐色	5	14	内面腹面に胎敷
4	70	埴土2	一括	陶器	土甕	不明	19C	-	-	-	灰白色	10	14	内面から外周面腹面に厚めの胎敷
4	72	埴土2	一括	陶器	罌鉢	常	18C	[34.1]	-	-	暗褐色	10	14	口縁部外縁の管突出大きく横三条、内面口唇 部に一糸の溝、胎敷状工具の跡目で全周2mm で深く溝
4	73	埴土2	一括	陶器	罌鉢	常	18C	-	-	-	赤褐色	10	14	口縁部外縁の管突出やや大きく横二条、内面 縁部は突出しない、胎敷状工具の跡目で全周 2mmで深く溝
5	74	埴土1	一括	陶器	罌鉢	常	18C	-	-	-	赤褐色	5	15	口縁部外縁の管突出大きく横三条、内面口唇 部に一糸の溝胎敷状工具の跡目で全周2mmで 深く溝
5	75	埴土3	一括	陶器	罌鉢	常	18C	-	-	[11.8]	赤褐色	10	15	胎敷文を被覆り後、胎敷状工具による窪目は 突出し、窪みは胎敷で深く胎敷有る
5	76	埴土2	一括	陶器	罌鉢	常	18C	-	-	[18.4]	赤褐色	10	15	胎敷文を被覆り後、胎敷状工具による窪目は 突出し、窪みは胎敷で深く胎敷有る
5	77	土城4	7	陶器	罌鉢	瀬戸・美濃	17C後半	[33.4]	-	-	灰褐色	10	15	口縁部の管突出大きく外反し受口 文を呈す。窪みは全周2mm
5	78	土城1	17	陶器	罌鉢	瀬戸・美濃	17C	-	-	-	灰褐色	10	15	胎敷の管突出、17mm位の胎敷状工具により窪 みは突出し全周2mm

実測 図数	番号	遺構	遺物 番号	種別	器種	生産地	年代	法量(cm)			胎土	遺存 (%)	写真 図数	特 徴
								口径	器高	底径				
5	79	壇土2	一括	陶器	鉢鉢	瀬戸・美濃	17C	-	-	[15.2]	灰褐色	10	15	底部の破片で抜き所に指摺。胴部下端から見込みにかけて欄目は僅。発取2~3mm。底部外面は指摺承切り痕
5	80	上埴1	3	陶器	鉢鉢	瀬戸・美濃	17C	[30.0]	-	-	灰褐色	10	15	口縁部の破片で、先端部で大きく反り受口状を呈す
5	81	埴土1	一括	磁器	蓋	不明	19C?	6.2	1.2	6.9	灰白色	100	15	外面磨き文に準
5	83	埴土2	一括	磁器	レンゲ	瀬戸・美濃	19C前半~ 中葉	-	-	-	白色	50	18	外面平円文。内面円文。手持部はほぼ直線に立つ
5	84	壇土2	一括	陶器	小壺?	不明	19C?	胴部 [6.2]	-	-	灰色	20	15	外面自然焼
5	85	壇土2	一括	陶器	お倉黒倉蓋	不明	19C?	[8.8]	1.7	[5.0]	褐色	40	15	台口蓋受部は丸みを帯び、お倉黒が付着
5	87	壇土2	一括	磁器	青磁花瓶	不明	19C	-	-	-	灰白色	30	15	青磁花瓶の把手の部分で、把手両外面に六つの点文
5	88	壇土2	一括	磁器	青磁花瓶	不明	19C	[8.0]	-	-	灰白色	30	15	青磁花瓶の口縁部から柄の部分で、肩部に對称に小鼻が配されている
5	89	壇土1	一括	磁器	青磁小皿	不明	19C	[9.4]	[2.9]	[4.4]	灰白色	20	15	口縁波状
5	90	壇土1	一括	陶器	土瓶	不明	19C	[8.0]	-	胴部 [14.0]	灰色	30	15	発行。白色地に黒い茶色の葉文及び唐字文。器厚2mm前後
5	91	壇土2	一括	陶器	土瓶蓋	東北?	19C	最大 [8.0]	-	最小 [4.5]	灰色	40	15	つまみは窪み中央に配され、見込みは若干窪む。網線飾
5	92	壇土2	一括	陶器	土瓶	不明	19C	[8.0]	-	-	おうと色	40	15	注口部長5.0cm。先端部径1.2cm。胴部表面から35°傾斜。胴部には径9~7mmの円形の穴が二つ
5	93	壇土2	一括	陶器	土瓶	東北?	19C	長 [3.7]	-	-	灰色	10	15	注口部で、胴部には径7mmの円形の穴が二つ。網線飾
5	94	壇土1	一括	磁器	徳利	肥前	18C後半~ 19C前半	-	-	-	灰白色	20	15	外面磨き文。内面一部焼がたれている
5	95	壇土2	一括	陶器	徳利	瀬戸・美濃	19C前半	3.8	-	-	灰褐色	20	15	外面焼物。内面一部にたれている。口縁部に一段の稜
5	96	上埴4	5	陶器	徳利	瀬戸・美濃	19C前半	3.6	-	肩部 11.0	灰褐色	30	13	外面焼物。内面一部にたれている。口縁部に一段の稜
5	97	埴土1	一括	陶器	徳利	瀬戸・美濃	19C前半	-	-	7.0	灰褐色	30	15	外面焼物。内面一部にたれている。底面回転ヘラケズリ
5	98	埴土2	一括	陶器	徳利	瀬戸・美濃	19C中葉	-	-	胴部 [11.0]	灰白色	40	15	外面焼物。内面一部にたれている
6	99	壇土2	一括	陶器	浅瓶	瀬戸・美濃	19C	最大 [20.9]	[14.7]	11.4	灰褐色	95	16	外面胴部下端まで焼物。孔径5.0cm。把手欠損。上面磨き
6	108	埴土2	一括	陶器	茶碗	信楽	19C前半	最大 9.1	6.1	5.0	黄白色	90	16	底面以外全面焼物。脚部は5.0cmで受蓋の指環は浅い。襷は口縁部より若干低い
6	109	壇土2	一括	陶器	油皿	瀬戸・美濃	19C前半	8.0	1.8	4.2	-	100	16	内面鉄輪二度掛け。外面焼物取り後直し掛け。底面回転ヘラケズリ
6	110	壇土2	一括	陶器	灯明受皿	瀬戸・美濃	19C前半	8.5	1.6	4.0	黄灰色	95	16	底面から口縁部へは緩やかに開く。内面鉄輪二度掛け。外面焼物取り後直し掛け。底面回転ヘラケズリ。襷は口縁部とはほぼ同じ高さ
6	111	壇土2	一括	陶器	灯明受皿	瀬戸・美濃	19C前半	7.2	1.6	3.4	-	100	16	底面から口縁部へは緩やかに開く。内面鉄輪二度掛け。外面焼物取り後直し掛け。底面回転ヘラケズリ。襷は口縁部より低い
6	112	壇土2	一括	陶器	灯明受皿	瀬戸・美濃	19C前半	7.1	1.5	3.2	-	100	16	底面から口縁部へは緩やかに開く。内面鉄輪二度掛け。外面焼物取り後直し掛け。底面回転ヘラケズリ。襷は口縁部より低い
6	113	壇土1	一括	陶器	油皿	信楽	19C前半	[10.4]	2.4	[4.4]	黄白色	40	16	内面全体から外面口唇部まで焼物。外面及び底面回転ヘラケズリ
6	114	壇土2	一括	陶器	灯明受皿	瀬戸・美濃	19C前半	[8.0]	1.5	[3.2]	黄灰色	50	16	底面から口縁部へは緩やかに開く。内面鉄輪二度掛け。外面焼物取り後直し掛け。底面回転ヘラケズリ。襷は口縁部より低い
6	115	壇土2	一括	陶器	灯明受皿	瀬戸・美濃	19C前半	[7.0]	1.5	[3.4]	黄灰色	40	16	底面から口縁部へは緩やかに開く。内面鉄輪二度掛け。外面焼物取り後直し掛け。底面回転ヘラケズリ。襷は口縁部より低い
6	116	壇土2	一括	陶器	油皿	瀬戸・美濃	19C前半	[8.0]	1.0	[4.0]	黄灰色	30	16	底面から口縁部へは緩やかに開く。内面鉄輪二度掛け。外面焼物取り後直し掛け。底面回転ヘラケズリ

100～107は土師質土器のカワラケ皿で、全て油煙の付着が認められ、灯明受皿として使用されている。時期はいずれも18世紀後半から19世紀前半である。100～106までは土坑1の覆土中及び底面から出土している。100は片面がやや濡れ気味で正円ではなく、内面底面は起伏がある。内面体部から口縁部、外面口縁部から体部にかけてロクロナデ、外面底部は回転系切り痕が見られる。口縁部には小さいが厚く油煙が付着している。101は摩耗しているが内面体部から口縁部、外面口縁部から体部にかけてロクロナデ、外面底部は回転系切り後ナデ調整が見られる。口縁部には大きく厚く油煙が付着している。102は内外面ともに摩耗が激しく、かろうじて回転系切り痕が見られ、内面に薄く油煙が付着していたようである。底部から口縁部にかけてやや外反気味に立ち上がる。103はやや摩耗しているが内面体部から口縁部、外面口縁部から体部にかけてロクロナデ、外面底部は回転系切り後部分的なナデ調整が見られる。104は完形ではないが濡れ気味で正円ではなく、内面底面は起伏がある。内面体部から口縁部、外面口縁部から体部にかけてロクロナデ、外面底部は回転系切り後ナデ調整が見られる。内面には薄く油煙が付着している。105はほぼ正円で内面底面は起伏がある。内面体部から口縁部、外面口縁部から体部にかけてロクロナデ、外面底部は回転系切り後ナデ調整が見られる。内外面ともに薄く油煙が付着している。106は105と同じタイプで、105よりは油煙がやや多く付着している。106は出土したカワラケの中では最も小型であるが、外面口縁部から体部にかけてロクロナデ、外面底部は回転系切り後ナデ調整が見られる。内外面ともに薄く油煙が付着している。

第7表 出土土師質土器・在地土器観察表

[] は推定値又は残存値

発掘 図版	番号	造端	遺物 番号	種別	器種	年代	法量(cm)			胎土	焼成	造寸 (%)	写真 図版	特 徴
							口径	器高	底径					
4	69	埋土2	一括	土師質土器	行平鍋	19C	[21.6]	-	-	褐色	普通	30	14	外面黒色
4	71	埋土2	一括	土師質土器	罐鉢	18C後半～ 19C前半	-	-	-	赤褐色	普通	5	14	中央の土器継ぎ接合部、器目は細く浅い
6	82	埋土2	一括	土師質土器	縁皿	18C	7.9	1.5	7.4	黄褐色・黒目 びつ	普通	100	16	天井部から縁にロクロナデ、縁は内反気味に 下る。見込みには黒目
6	86	埋土1	一括	土師質土器	火鉢	18C?	-	-	-	赤 色	やや 不良	20	16	内外面に白色塗りが施され、外壁には花と鳥 紋が押圧
6	100	土坑1	23	カワラケ	灯明受皿	18C後半～ 19C前半	9.0	2.0	4.4	石英・長石、白 色・黒色粒子	普通	95	16	口縁部油煙付着、内面体部から口縁部、外面 口縁部から体部ロクロナデ、外面回転系切り 痕
6	101	土坑1	22	カワラケ	灯明受皿	18C後半～ 19C前半	8.5	1.9	4.2	石英・長石、赤 色粒子	普通	95	16	口縁部油煙付着、内面体部から口縁部、外面 口縁部から体部ロクロナデ、外面回転系切り 痕
6	102	土坑1	11	カワラケ	灯明受皿	18C後半～ 19C前半	8.5	1.9	4.1	石英・長石、赤 色粒子	やや 不良	80	16	内面体部から口縁部、外面口縁部から体部ロ クロナデ、外面回転系切り痕、摩耗が激しい
6	103	土坑1	27	カワラケ	灯明受皿	18C後半～ 19C前半	8.3	1.8	5.0	石英・雲母、赤 色粒子	良好	80	16	内面体部から口縁部、外面口縁部から体部ロ クロナデ、外面回転系切り痕
6	104	土坑1	34, 25	カワラケ	灯明受皿	18C後半～ 19C前半	10.2	2.2	5.0	石英・長石、赤 色粒子	普通	80	16	内面深く油煙付着、内面体部から口縁部、外 面口縁部から体部ロクロナデ、外面回転系切 り痕
6	105	土坑1	12, 13	カワラケ	灯明受皿	18C後半～ 19C前半	6.6	1.3	3.2	石英・長石、黒 色粒子	良好	90	16	内外面深く油煙付着、内面体部から口縁部、 外面口縁部から体部ロクロナデ、外面回転系切 り痕
6	106	土坑1	2	カワラケ	灯明受皿	18C後半～ 19C前半	6.4	1.9	4.0	石英・長石、赤 色・黒色粒子	普通	100	16	内外面深く油煙付着、内面体部から口縁部、 外面口縁部から体部ロクロナデ、外面回転系切 り痕
6	107	埋土2	一括	カワラケ	灯明受皿	18C後半～ 19C前半	5.0	1.0	2.7	石英・長石、黒 色粒子	普通	95	16	内外面深く油煙付着、内面体部から口縁部、 外面口縁部から体部ロクロナデ、外面回転系切 り痕

(4) その他の遺物 (実測図版 6, 7, 第 8, 9, 10, 11 表, 写真図版 16, 17)

ここで取り扱う本遺跡出土遺物は、金属製品・瓦製品・石製品・土製品である。

金属製品

124~135の12点出土し、そのほとんどが鉄製品で唯一124の1点のみが銅製品である。また、遺構に伴って出土したものが8点と多い。124は小柄の柄部で刀身がわずかに残存する。柄部は薄い銅箔で覆われ、文様が施されているようであるが、緑青が著しく、確認不能である。土坑1の覆土中面から出土した。125は小刀の柄と刀身部分で、土坑1の覆土中面から出土した。126は鏝で断面正方形で重量感がある。土坑1の覆土下面から出土した。127は断面が若干扁平な不明鉄製品である。土坑1の覆土中面から出土した。128~135は釘でいずれも断面方形である。128は土坑4の覆土上面から出土した。129~131は土坑1の覆土一括遺物である。

瓦製品

117~122の軒丸瓦1点、丸瓦3点、平瓦2点の計6点出土したが、遺構に伴うものは1点もない。時期は6点ともに18世紀後半から19世紀前半である。117は連珠三巴文軒丸瓦の瓦当部の完存品で、左巻きの三巴文の周りにやや大きめの珠文14個をあしらっている。三巴文を囲む圏線はない。118, 119, 121は丸瓦である。118は5点接合したもので、裏面にはやや太めの竹管による二条の沈線がある。119は表面に「㊦」の刻印が施されている。121は裏面にヘラ状工具による圧痕がある。120, 122は平瓦で、いずれも被熱による若干の変色と煤の付着が見られる。

石製品

出土したものはいずれも破片で3点と少なく、遺構に伴うものはない。136, 137は火打ち石の破片である。138は黒色の碁石の破片である。

土製品

いわゆる土玉であり、土坑4の覆土上面から出土した。表面には煤の付着が見られる。

参考文献

※1990「尾呂」-愛知県瀬戸市 定光寺カントリークラブ増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-

瀬戸市教育委員会

※1992「東京都新宿区内藤町遺跡」-放射5号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書-第Ⅱ冊遺物編

※1993「江戸のやきものと暮らし」新宿区内藤町遺跡調査会

※1998「瀬戸市史」陶磁史篇六 瀬戸市史編纂委員会

※2000「九州陶磁の編年」-九州近世陶磁学会10周年記念-九州近世陶磁学会

第8表 出土金属製品観察表

[] は推定値又は残存値

実測 図版	番号	遺構	遺物番号	器種	法量 (cm)			材質	写真図版	備 考
					最大長	最大幅	最大厚			
6	124	土坑1	4	小鞘	[11.3]	1.5	0.6	銅・鉄	16	刀身一部残存
6	125	土坑1	8	小刀	[8.4]	[2.5]	[0.6]	鉄	16	
6	126	土坑1	19	鍔	[8.4]	2.5	0.6	鉄	16	
6	127	土坑1	5	不明	[4.1]	[1.1]	[0.6]	鉄	16	
6	128	土坑4	4	釘	[3.0]	[0.4]	[0.4]	鉄	16	屈曲する
6	129	土坑1	一括	釘	[4.6]	[0.5]	[0.5]	鉄	16	
6	130	土坑1	一括	釘	[4.0]	[0.4]	[0.4]	鉄	16	屈曲する
6	131	土坑1	一括	釘	[2.9]	[0.3]	[0.3]	鉄	16	屈曲する
6	132	埋土2	一括	釘	[3.8]	[0.6]	[0.5]	鉄	16	屈曲する
6	133	埋土2	一括	釘	[3.5]	[0.5]	[0.5]	鉄	16	屈曲する
6	134	埋土2	一括	釘	[2.9]	[0.9]	[0.6]	鉄	16	
6	135	埋土2	一括	釘	[3.0]	[0.5]	[0.5]	鉄	16	屈曲する

第9表 出土瓦製品観察表

[] は推定値又は残存値

実測 図版	番号	遺構	遺物 番号	種別	器種	年代	法量 (cm)			胎土	焼成	遺存 (%)	写真 図版	特 徴
							最大長	最大幅	最大厚					
7	117	埋土2	一括	瓦質	軒丸瓦	18C後半～ 19C前半	径 15.5	-	-	暗灰色	普通	40	17	三巴文、珠文 (14)、圏線なし
7	118	埋土1	一括	瓦質	丸瓦	18C後半～ 19C前半	残長 [16.5]	-	-	暗灰色	普通	40	17	裏面竹管による二条の沈線
7	119	埋土1	一括	瓦質	丸瓦	18C後半～ 19C前半	残長 [14.2]	-	-	暗灰色	普通	40	17	表面に刻印「㊦」あり
7	120	埋土1	一括	瓦質	平瓦	18C後半～ 19C前半	残長 [15.7]	-	-	暗灰色	普通	40	17	被熱による爆付音
7	121	埋土1	一括	瓦質	丸瓦	18C後半～ 19C前半	残長 [9.0]	-	-	暗灰色	普通	10	17	裏面へつ状工具による圧痕あり
7	122	埋土1	一括	瓦質	平瓦	18C後半～ 19C前半	残長 [6.5]	-	-	暗灰色	普通	10	17	被熱による爆付音

第10表 出土石製品観察表

[] は推定値

実測 図版	番号	遺構	遺物番号	器種	法量 (cm)			遺存状態	写真図版	備 考
					最大長	最大幅	最大厚			
7	136	埋土2	一括	火打ち石	23	13	9	破片	17	
7	137	埋土2	一括	火打ち石	26	18	6	破片	17	
7	138	埋土2	一括	番石	[22]	-	[7]	破片	17	

第11表 出土土製品観察表

実測 図版	番号	長さ (mm)	最大幅 (mm)	最大孔径 (mm)	最小孔径 (mm)	重さ (g)	焼成	色調	出土状況	遺存度 (%)	写真 図版	備 考
7	123	18	17	3	2.5	5.44	普通	暗褐色	土坑4埋土	100	17	爆付音

Ⅲ ま と め

1 検出遺構について（第3, 7～12図, 第3～5表, 写真図版2-2～6）

本調査地点では、現地表面から遺構検出面までの深さは約3.5mもあり、二度にわたる大規模な埋立て整地が行われたことは先に述べた。「埋土1」は全体的に暗黄褐色で現地表面から約2.5mの厚さがあり、ハードローム塊やコンクリートブロック、清涼飲料水のビン等の現代の産廃物も多く含まれ、非常に強く填圧され強く締まっていた。この「埋土1」は県立佐倉東高等学校が鎌木町から現所在地に校舎を新築移転する、昭和40年代前半に行われた大規模な整地による所産である¹⁾。この「埋土1」には近世佐倉城に関連した陶磁器等の遺物も含まれており、その遺物の多くは「埋土1」の最下面から出土した。このことで、「埋土1」は周辺を削平した土で構成されているということが理解できた。

「埋土2」は約1mの厚さで、全体的に黒色及び黒褐色で粘土塊を含み、この粘土塊の多少又はその有無により5層に分層できた。この「埋土2」を取り除くと、「埋土2」最下層がしみ込んだと思われる明黒褐色の地山（遺構検出面）があらわれた。「埋土2」の上面からは小銃の弾が出土し、また、19世紀前半の遺物を出土した遺構の覆土が、「埋土2」の最下層とほぼ同一の黒色土を主体としたものであることから、廃城からあまり時を隔てない時期の所産だと考えられる。また、本調査地点は明治14年（1881）測量の「佐倉聯隊施設迅速測図」²⁾によれば、練兵場の一角に当たり、この時点ですでに整地されていた。これらのことからすると「埋土2」は廃城後聯隊の兵営舎建設が開始される明治6年（1873）から、「佐倉聯隊施設迅速測図」が作られる明治14年（1881）頃の埋土とすることが妥当であろう。この「埋土2」にも近世佐倉城に関連した陶磁器等の遺物も含まれている。ちなみに本調査地点出土の遺物のほとんどが、「埋土1」及び「埋土2」からである。いずれにしてもこの埋土は江戸時代末の佐倉城を、そっくり埋没保存させていたことになる。

本調査地点は城絵図（巻頭図版1, 第12図参照）によれば、三ノ丸御殿東脇の長屋が描かれている部分に当たると思われる。検出された遺構は、建物柱跡24基、土坑10基、ピット状遺構27基である。

建物柱跡は「埋土2」除去後、明黒褐色の地山まで掘り下げた時点で検出された。柱跡の覆土は黒色土を主体としており、柱跡の配列も明確に確認できた。柱跡13, 14を除いた柱跡の覆土自体の締まりは普通であったが、覆土除去後の底面は強く締まっていた。このことはおそらく根石を置いた痕跡と思われるが、残念ながら根石を確認することはできなかった。その他の遺構で建物柱跡とほぼ同一の覆土をもつものは、土坑1, 2, 4, 5, ピット状遺構P8, 11で、同時期に存在していたと考えられる。また、土坑1, 4は18世紀後半から19世紀前半を主体とした遺物が出土しており、覆土が黒色土を主体としたこれらの遺構はこの時期に相当すると思われる。これ以外の遺構は地山を精査している段階で確認できたもので、期的には建物柱跡以前のものとしてすることができる。建物柱跡の桁行方位は平面的には広小路にほぼ平行で、城絵図（巻頭図版1, 第12図参照）とも一致する。また、巻頭図版1は幕末頃を写し取った図とされており、図が正しいとすれば三ノ丸御殿東脇の曲屋風の長屋跡と考えられる。しかし、第7図で示したとおり、A-A'の桁行方位がB-B', C-C', D-D'とは若干異なり、北西に行くに従い梁行間隔は広がり、また、D-D'の桁行間隔は他のものと対応していないということから、建て増しの可能性も考えられる。

1996(平成8)年に(財)印旛都市文化財センターが天神曲輪で行った発掘調査では、遺構確認面の標高は約29mである³⁾。この地点は、本調査地点から広小路を挟んで東北東に直線距離で約180m隔てた地点である。本調査地点の遺構確認面の標高が約24mであることから、両地点の標高差は約5mあることになる。また、聯隊施設迅速測図の練兵場は南へ行くに従い標高が低くなっており、練兵場の整地が地山を生かしたものとすれば、本調査地点は当時城内でも比較的標高の低い地点であったと思われる。

先に触れたが、遺物が出土した土坑は1、4のみで性格不明なものが多いが、土坑1は底面から生活雑器の瀬戸・美濃産の陶器碗片及び灯火具が出土しており、廃棄場としての性格が窺われる。また、ピット状遺構については柱穴として認められるものもあるが、遺物の出土もほとんどなく、時期及び性格不明なものが多い。ただし、覆土の状況からしてP8、11以外は建物以前の時期が妥当と思われる。

『古今佐倉真佐子』⁴⁾には、佐倉城城内についての記述⁵⁾があり、その中の一文には「向勘定場の内小役人長屋有る。」と記載されている。このことからすると長屋は小役人、いわゆる下級武士のための居住空間として捉えることができる。よって今回の調査で検出された遺構は、明治初年に聯隊が進駐する際に取り除かれた、幕末頃の下級武士が居住した長屋の一面である可能性が高いと思われる。佐倉城は各種の城絵図や資料から、屋敷割りや建物の位置等に大規模な変更は認められないが、小規模な変更は認められる。今後の課題としては、各時期における城内の土地利用の変遷を明確にしていく必要があると思われる。

2 出土遺物について(実測図版1~7, 第6~11表, 写真図版7~17)

先に示したとおり、図示できた遺物のうち遺構から出土した遺物は極めて少なく、全体の約16%でしかも残りは人工的に埋められた土の中に紛れ込んだものである。よって出土遺物の全体的な統計はあまり意味がないと判断し、ここでは取り扱わないこととする。

出土遺物のほとんどは陶磁器・土師質土器の生活雑器で、飲食具の茶碗・皿・盃・小杯・猪口・鉢・徳利・レンゲ等、調理具の掻鉢・土鍋、灯火具の乗獨・灯明受皿・油皿等、神仏具の花瓶、暖房具の火鉢、化粧具のお歯黒壺蓋、その他として水瓶・渡瓶・塩焼壺蓋があげられる。これらの産地は瀬戸・美濃系、肥前系の割合が多く、信楽系、堺もある。その他の遺物としては、瓦、金属製品では釘、鏝、小柄、小刀が出土しており、石製品としては碁石・火打ち石が、土製品としては土玉がそれぞれ出土した。時期は18世紀代から19世紀代にかけてのものがほとんどである。出土した陶磁器類の数は別として、質は江戸周辺のものに比べても遜色ないと思われる⁶⁾。当時の江戸は世界でも有数の大都市であり、人はもとより大量の物資が集積する場でもあった。本地佐倉出土の近世陶磁器の搬入元が、江戸及びその周辺にあるということは窺えるが、出土した陶磁器類がどのような形で、どのような流通経路でやってきたかについては、今後の課題として解明していく必要があると思われる⁷⁾。

本調査地点でも近世以外の遺物(土師器・須恵器)が出土しているが、摩耗が著しい小片がほとんどであり実測不能で、本報告書に掲載することはできなかった。そのほとんどが「埋土1」「埋土2」からの出土であり、埋土の性格上本調査地点周辺に古代の集落が存在する可能性は高いといえる⁸⁾。

この台地上には古代から、人間の生活の痕跡が包蔵されている。今回の調査では幕末の貴重な遺構・遺物を目の当たりにすることができた。現在は国立歴史民俗博物館及びその付属施設、佐倉中学校、佐倉東高等学校が建設されているが、城跡公園として保存整備も進んでいる。今後はこのような貴重な文化財を、確実に後世に残していく努力が必要であろう。

- 注1 県立佐倉東高等学校「創立七十周年記念誌」によれば、「昭和40年11月6日から新校地の整地工事起工式举行、陸上自衛隊第312地区施設隊により作業開始。」とある。また、最後の新築移転工事が行われ「昭和44年4月1日第3期工事（体育館並講堂、プール）着工」とある。
- 2 国立歴史民俗博物館 2004「佐倉城跡発掘調査報告」第1分冊中の巻頭図版Ⅲ「千葉県下総国印旛郡佐倉城（1881年測量の佐倉城跡・佐倉聯隊施設迅速測図）」による。
- 3 能勢幸枝 1996「佐倉城」-市立佐倉中学校給食室建設に伴う埋蔵文化財調査-（財）印旛郡市文化財センター
- 4 著者は渡辺善右衛門守由で宝暦三年（1753）以前の著作とされている。
- 5 本調査地点と検出遺構に関連した部分を分かりやすくまとめると、「広小路の北側に平行に走る幅細の道を裏広小路と称し、その裏広小路の北端部に天神社、その脇に真言宗の別当大正院（大乘院）があり、その近くには小役人の長屋がある。……天神曲輪から来ると広小路の四つ辻があり、真っ直ぐ進むと中下町で、一丁ほどは坂になっている。その坂の突きあたりは下大町で、ここは鷹匠町へ行く坂の上になる。」としている。（筆者大幅改訳）
- 6 新宿区内藤町遺跡調査会 1993「江戸のやきものと暮らし」
江戸遺跡研究会 1990「江戸の陶磁器」江戸遺跡研究会第3回大会発表要旨・資料
岩橋陽一他 1993「千代田区丸の内三丁目遺跡」東京都埋蔵文化財センター
- 7 篠丸頼彦著 1973「佐倉市史 巻二」によれば、「佐倉から江戸へは1日行程の近距離にあったため、商工業の発展はあまり見られず、日常生活物資を商う程度のものであった。」としている。また、「高価なものは佐倉で需めず江戸で買ったのが多いようである。」とし、その事例もあげている。このような状況で陶磁器はどのようにして佐倉に搬入されたのか、今後の課題である。
- 8 歴博建設に伴う一連の調査や（財）印旛郡市文化財センターの調査において壑穴住居跡が多数検出されている。参考資料として第2表に報告書名を掲載しているのでここでは省略する。

写 真 图 版

遺跡・遺構



佐倉城跡航空写真 (縮尺約1/10,000)



1. 調査区近景 (南西→)



2. 調査区遺構全景 (北東→)



1. 調査区遺構全景（北→）



2. 調査区遺構全景（南西→）



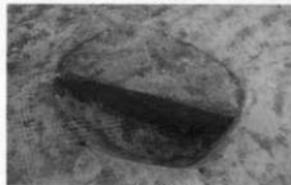
1. 建物柱跡 (北→)



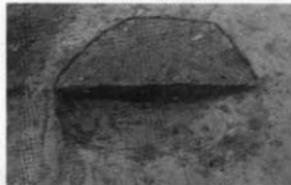
2. 建物柱跡 (北西→)



3. 柱5 (南西→)



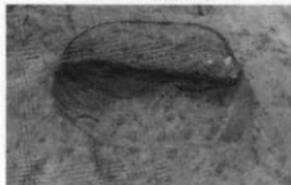
4. 柱6 (南西→)



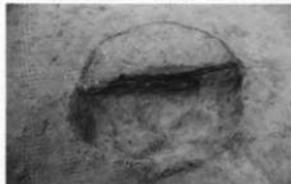
5. 柱9 (南西→)



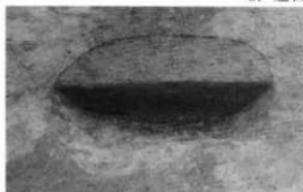
6. 柱10 (南西→)



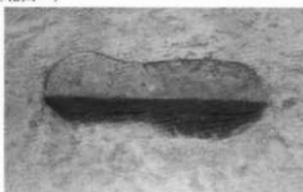
7. 柱11 (南西→)



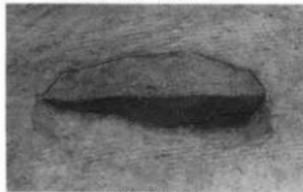
8. 柱12 (南西→)



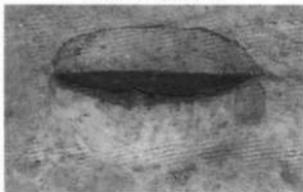
9. 柱16 (南西→)



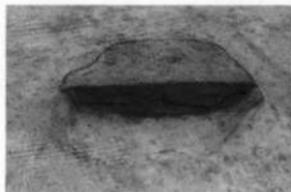
10. 柱17 (南西→)



11. 柱18 (南西→)



12. 柱19 (南西→)



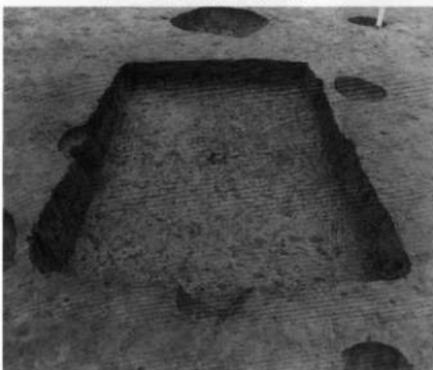
13. 柱20 (南西→)



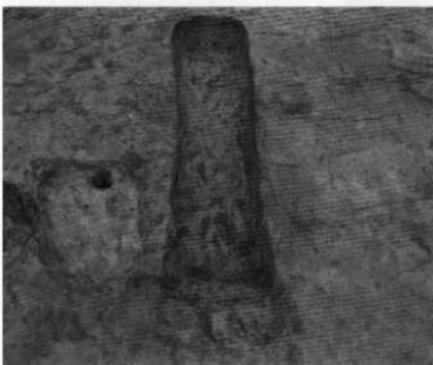
1. 土坑1 遺物出土遠景 (南西→)



2. 土坑1 遺物出土近景 (南東→)



2. 土坑1 完掘 (南西→)



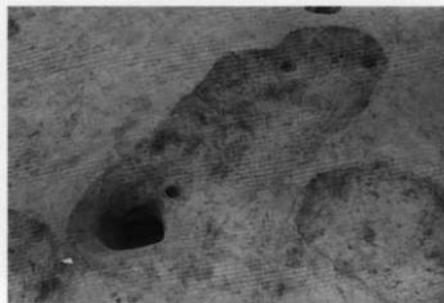
4. 柱2 完掘 (南東→)



5. 土坑3 完掘 (西→)



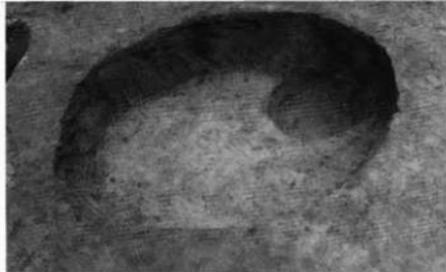
6. 土坑4 遺物出土状況 (東→)



7. 土坑5 完掘 (南→)



8. 土坑6 完掘 (南西→)



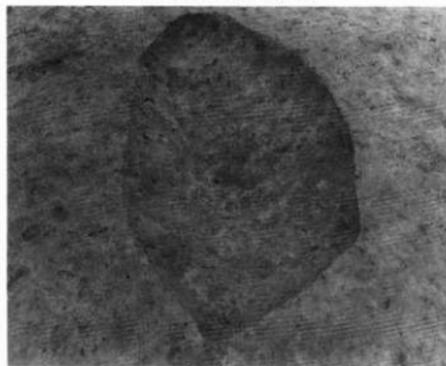
1. 土坑7完掘 (西→)



2. 土坑8完掘 (西→)



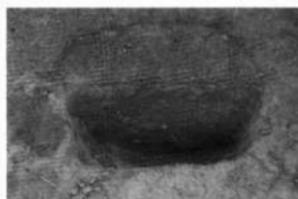
3. 土坑9完掘 (南→)



4. 土坑10完掘 (南西→)

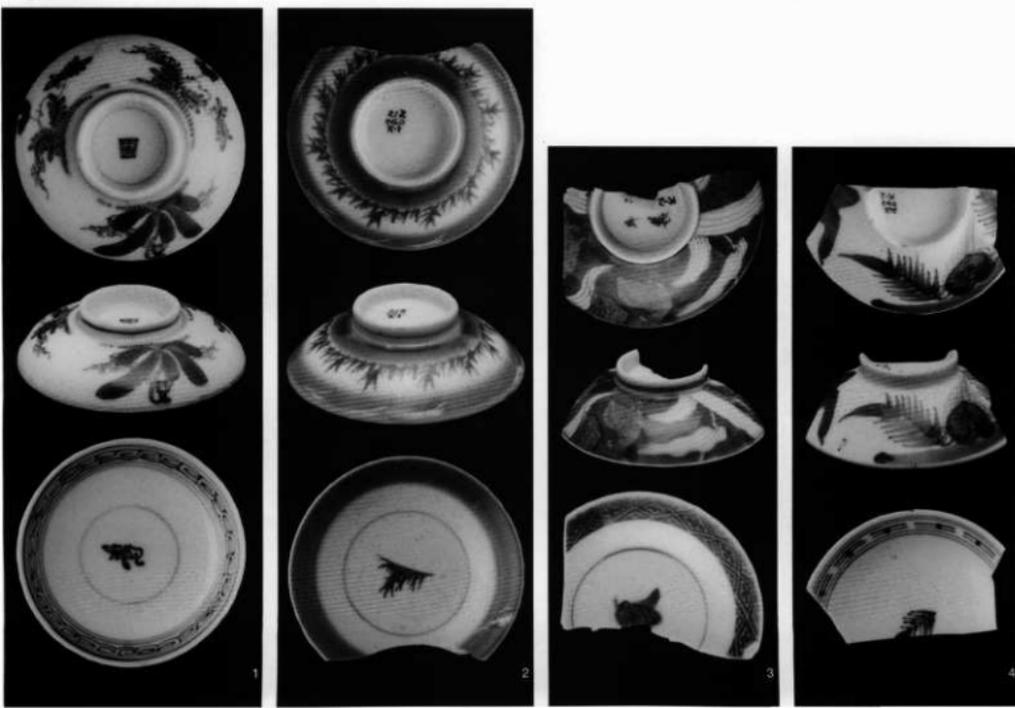
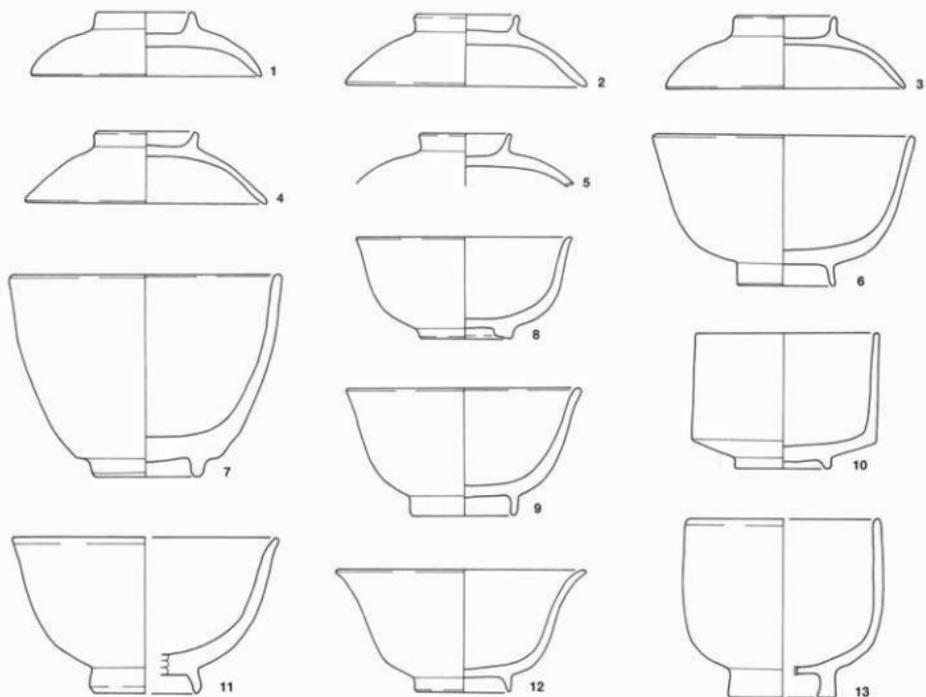


5. 調査終了後に検出された建物柱跡 (南東→)

6. 調査終了後に検出された建物柱跡
の柱3 (北東→)

7. 本跡基本土層 (南東→)

版
版
凶
凶
測
真
遺
實
寫

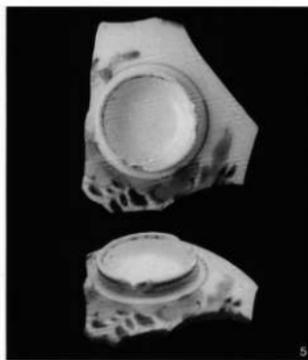




6



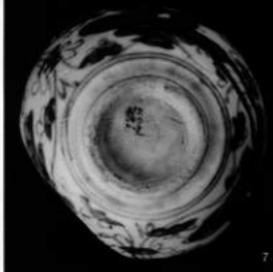
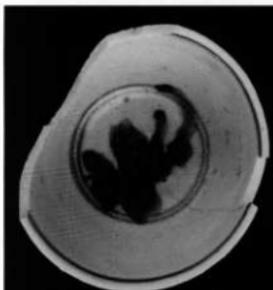
11



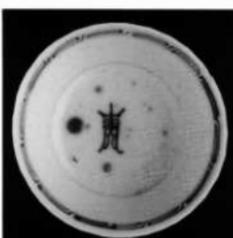
5



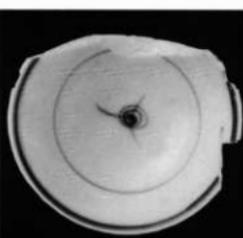
13



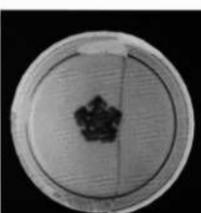
7



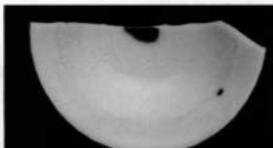
8



9

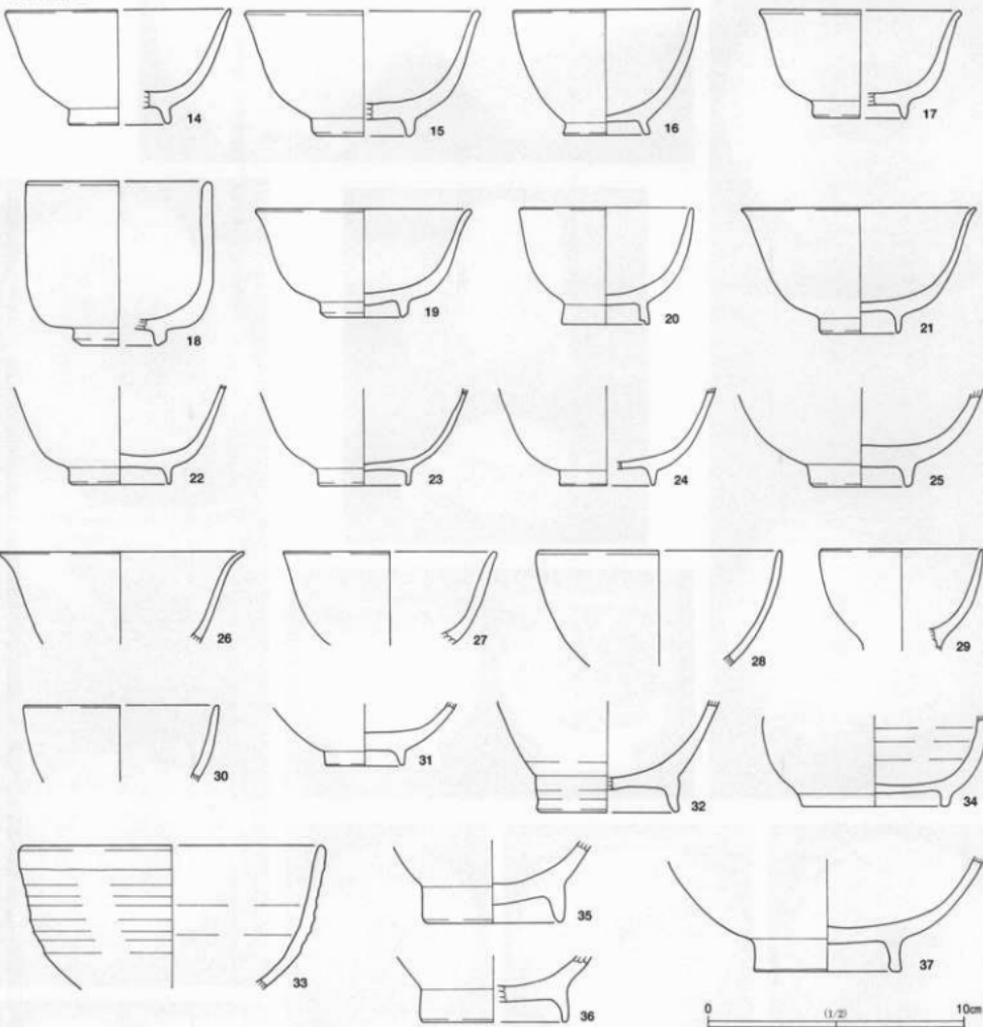


10

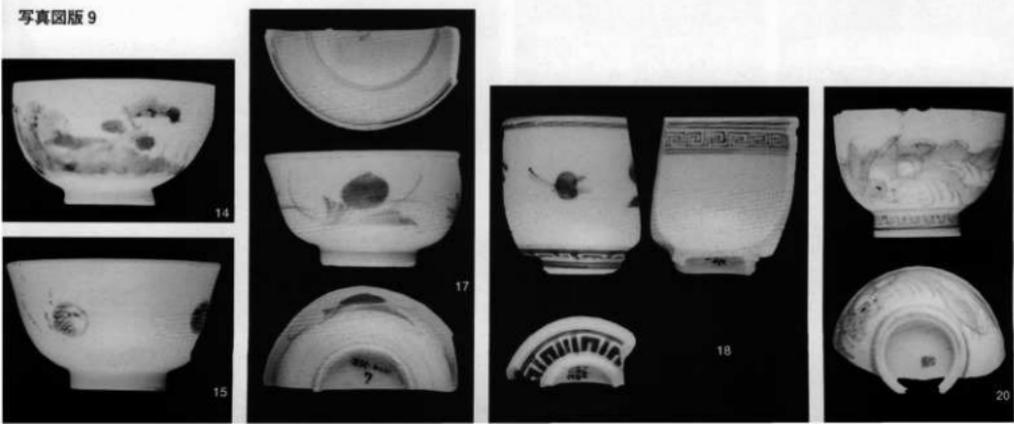


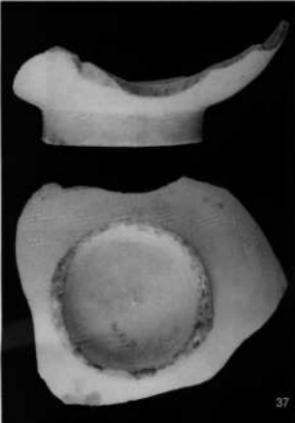
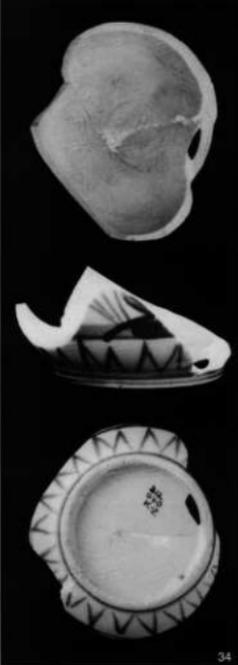
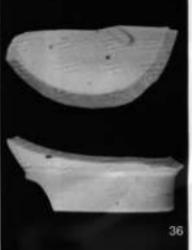
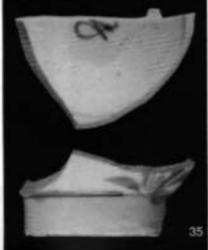
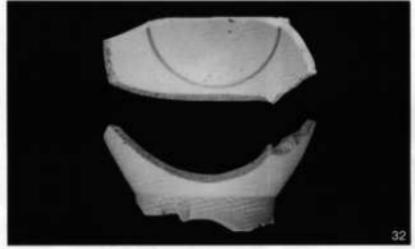
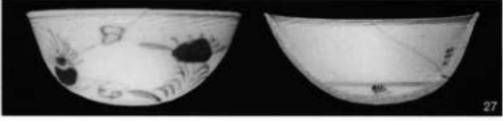
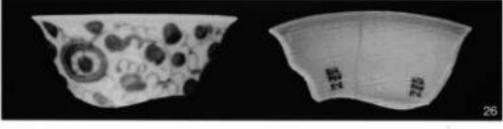
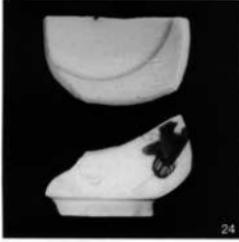
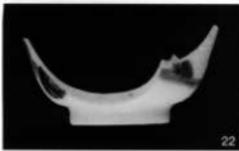
12

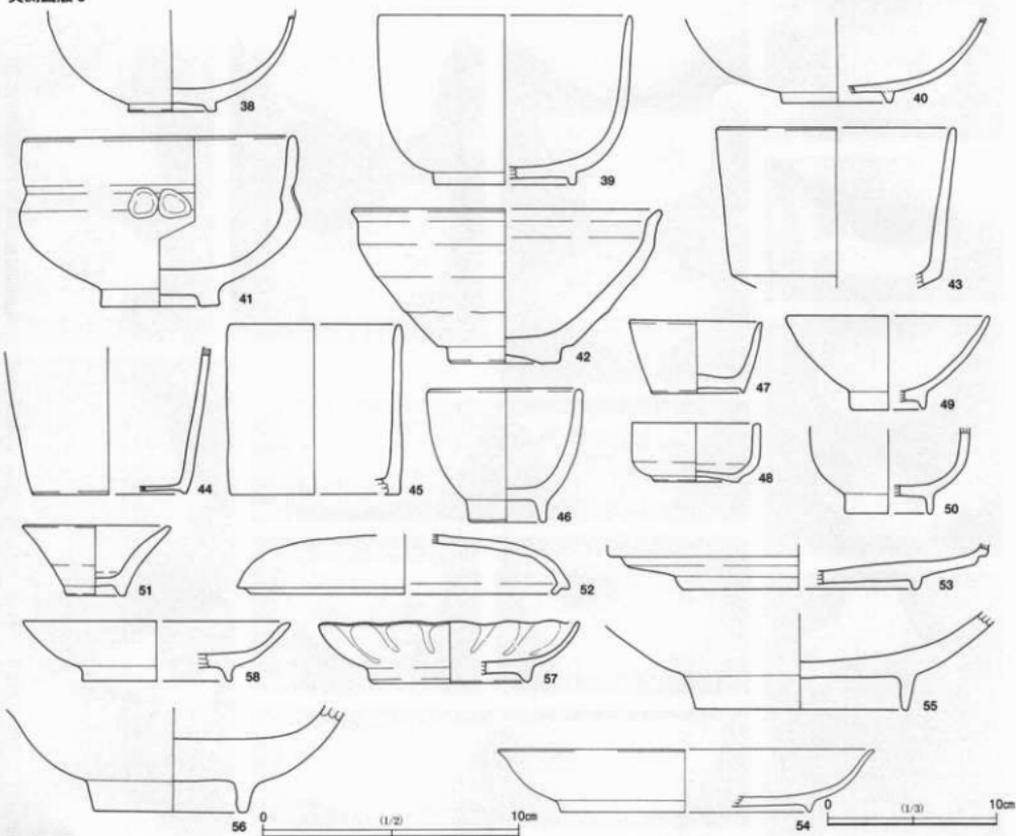
実測図版 2



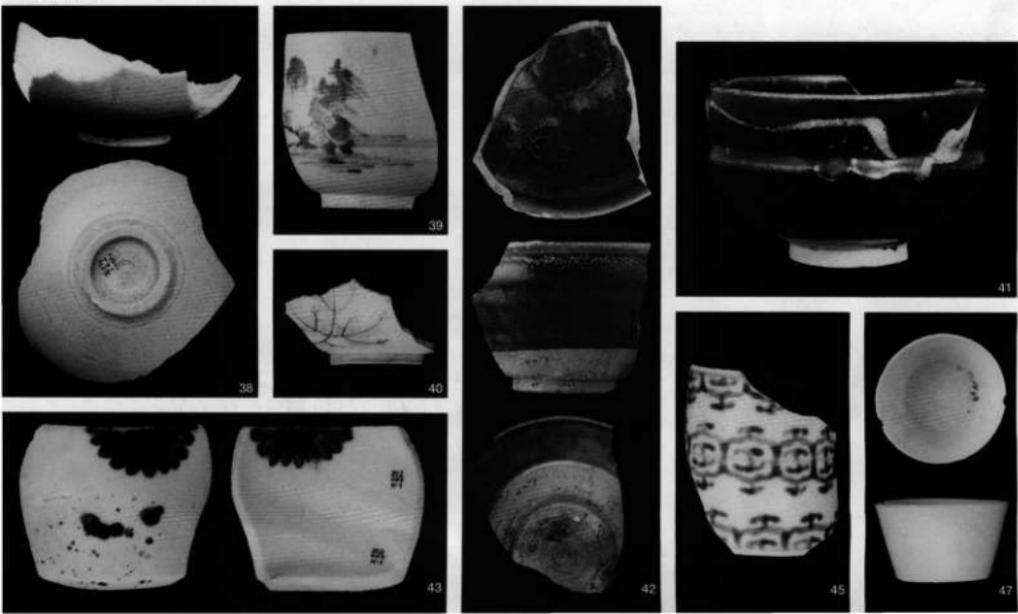
写真図版 9

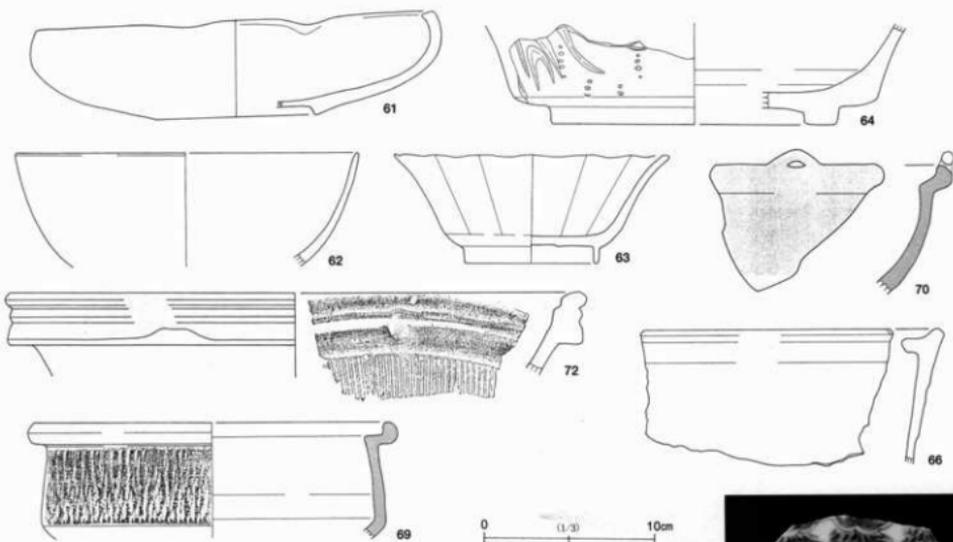
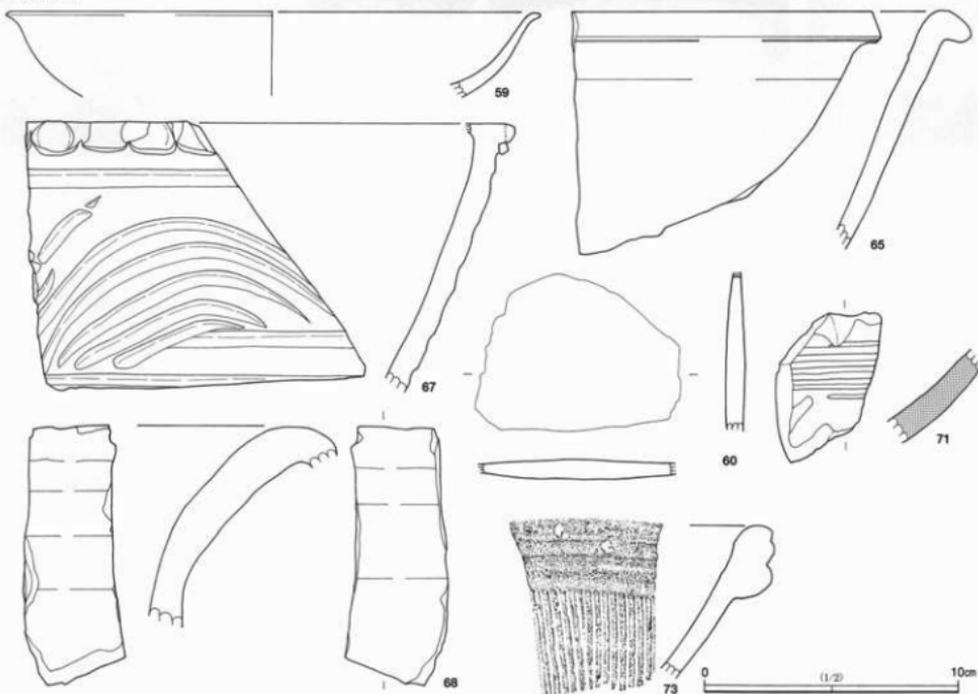




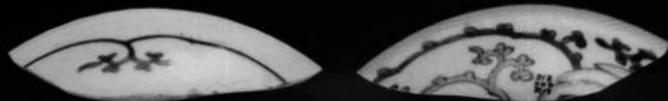


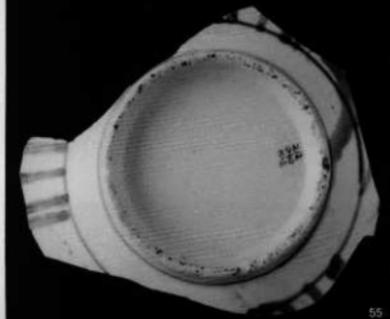
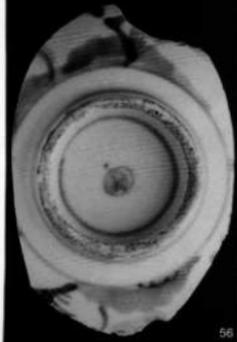
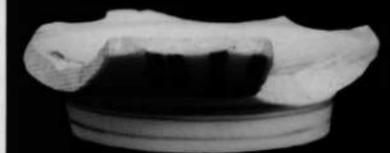
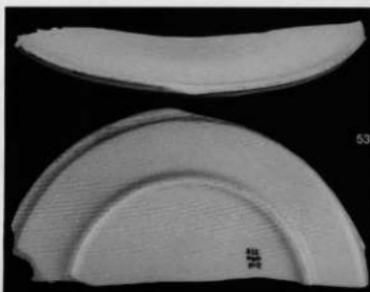
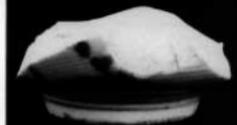
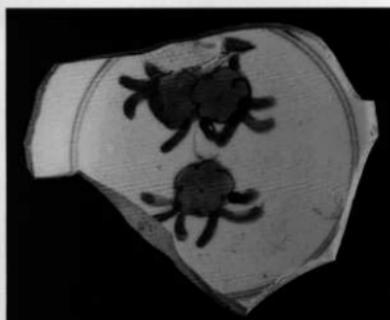
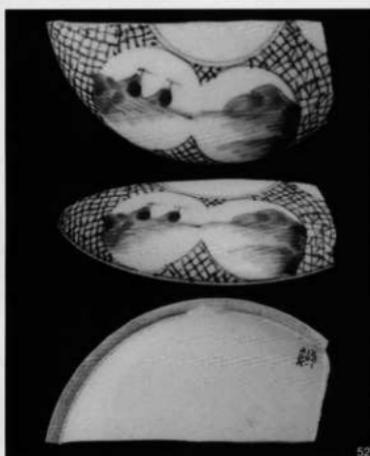
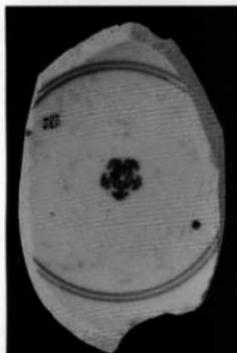
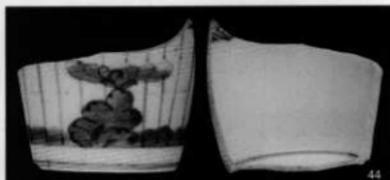
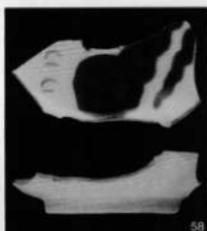
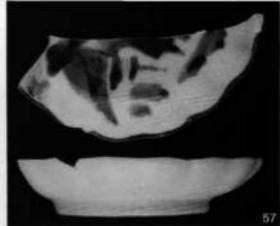
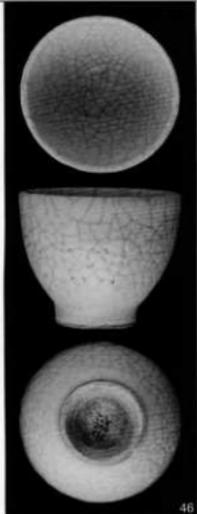
写真図版11

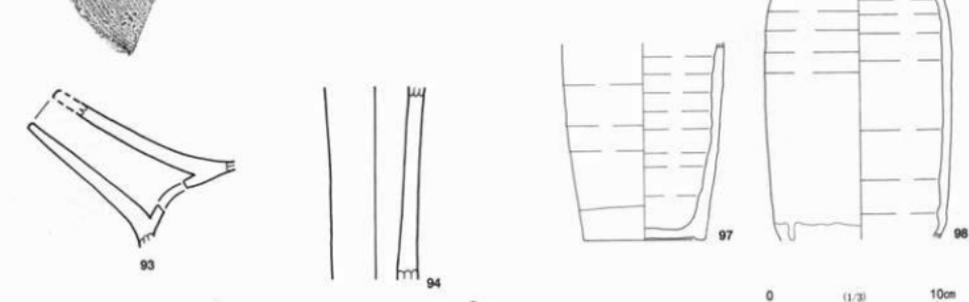
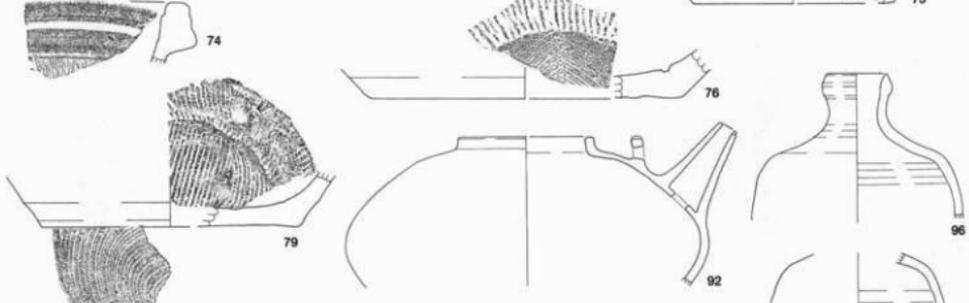
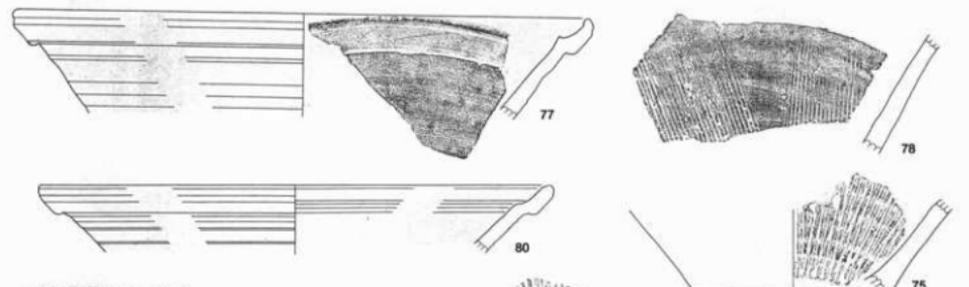
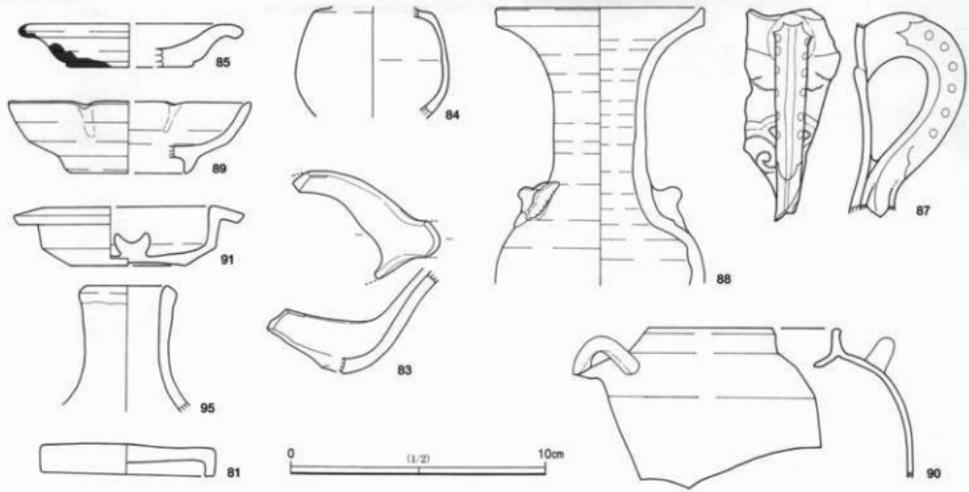




写真图版 13









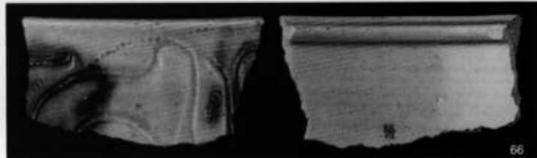
61



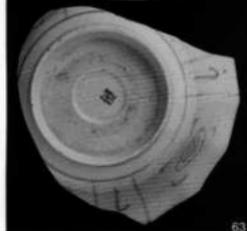
62



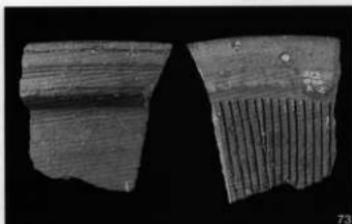
65



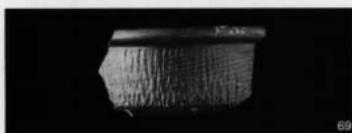
66



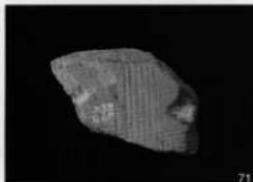
63



73



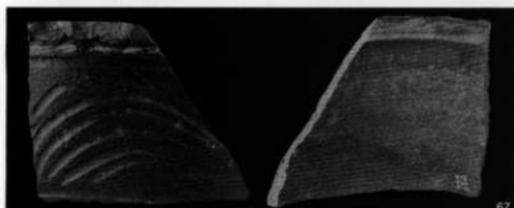
69



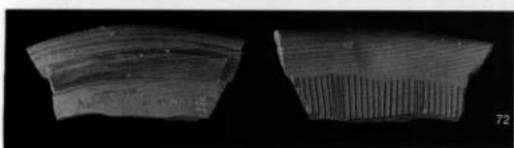
71



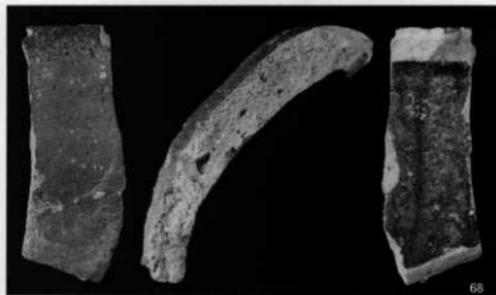
64



67



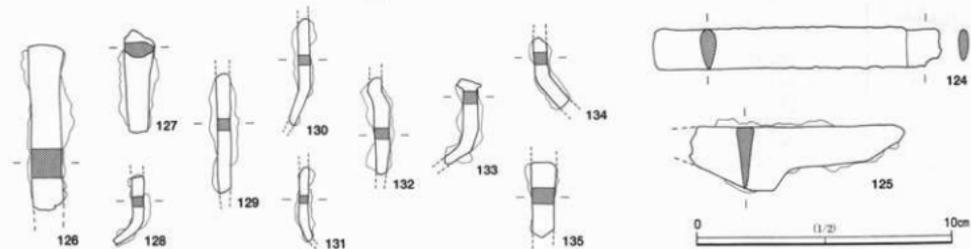
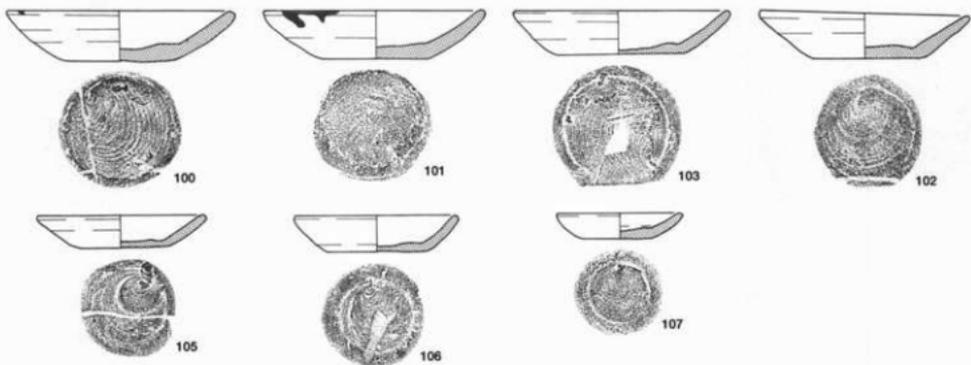
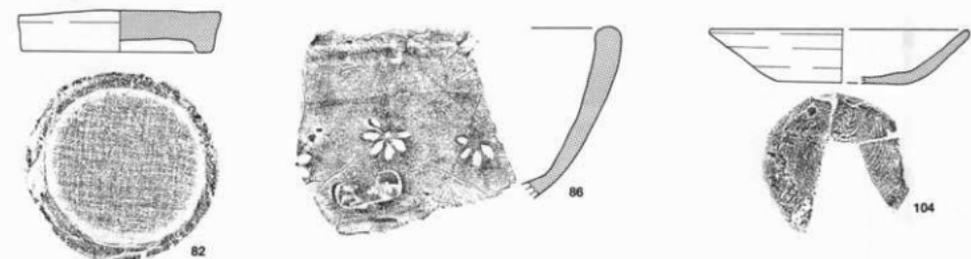
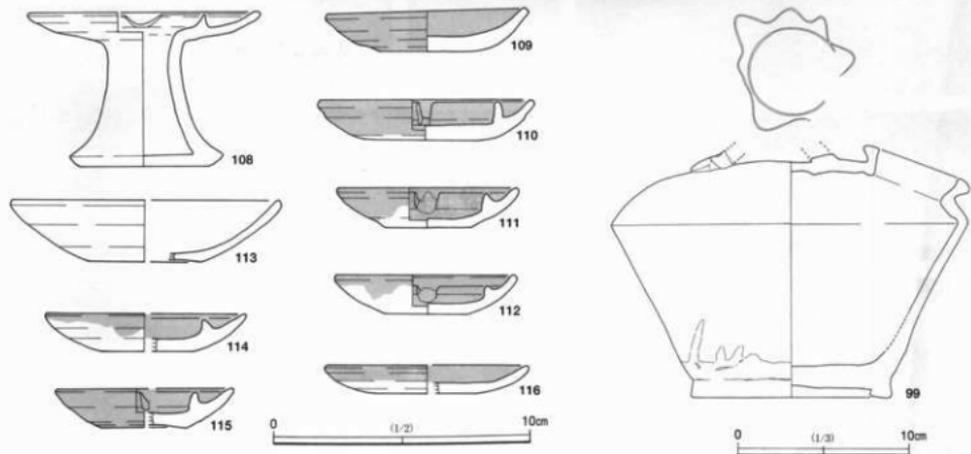
72



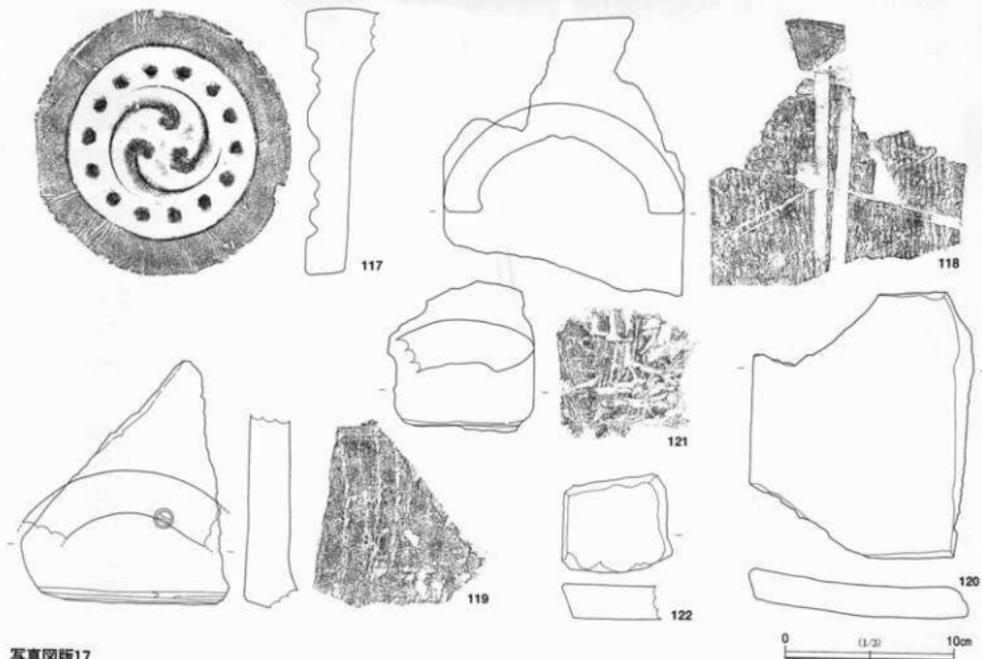
68



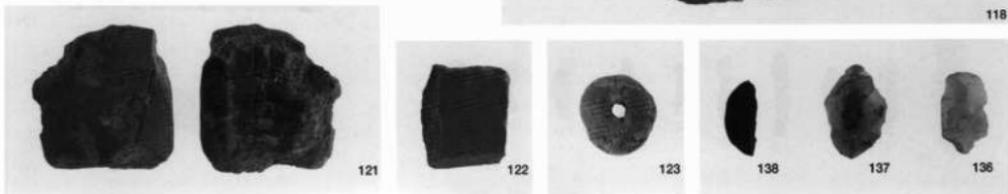
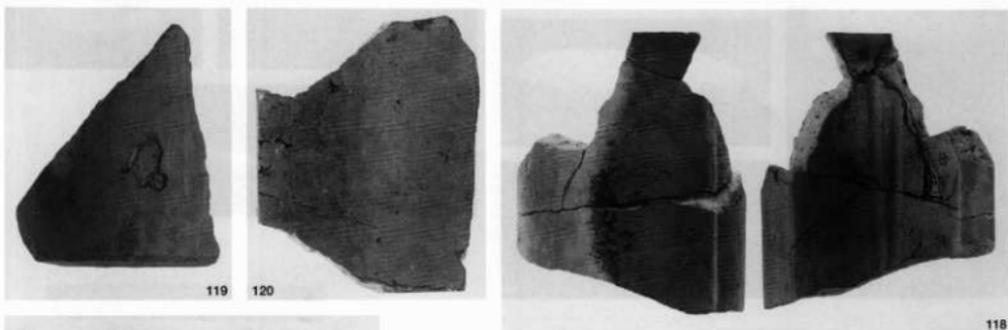
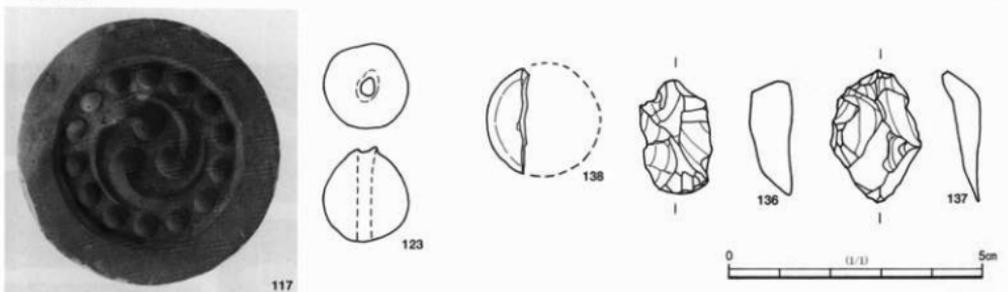
70

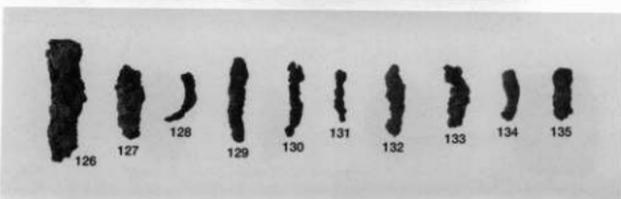
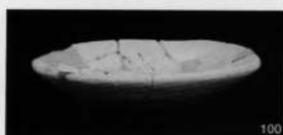
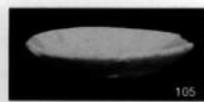
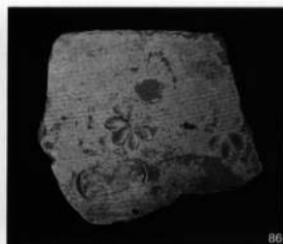
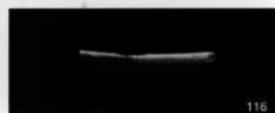
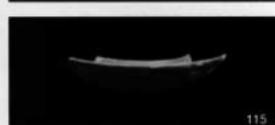
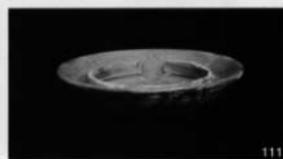
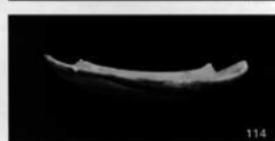
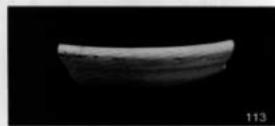
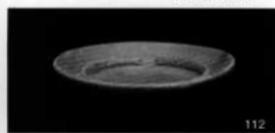
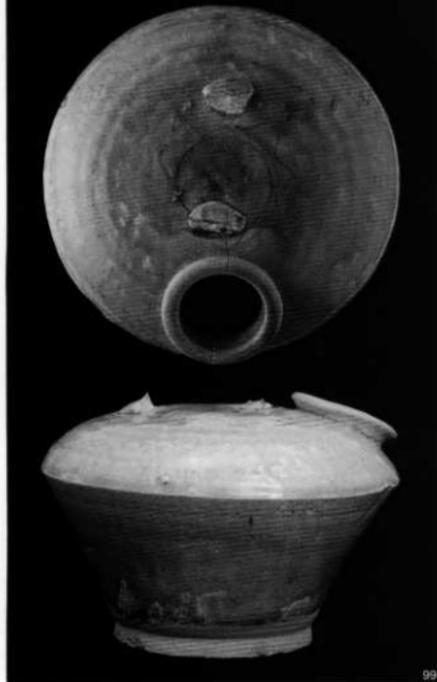






写真图版 17





報告書抄録

ふりがな	さくらしきくらじょうあと							
書名	佐倉市佐倉城跡							
副書名	千葉県立佐倉東高等学校共学化事業に伴う埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第498集							
編著者名	岸本雅人							
編集機関	財団法人千葉県文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2				TEL 043-422-8811			
発行年月日	西暦 2004年10月29日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
佐倉城跡	佐倉市城内町 278番地	212	040	35度 42分 56秒	140度 13分 26秒	20040405～ 20040428	667	県立佐倉東高等学校共学化事業に伴う埋蔵文化財調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
佐倉城跡	城跡	近世	建物柱跡 土坑 ピット状遺構	24基 10基 27基	土師器、須恵器 陶器、磁器 カワラケ、土鍋 土製品、瓦 金属製品 石製品			幕末の佐倉城関連の建物柱跡と土坑が検出された

千葉県文化財センター調査報告第498集

佐倉市佐倉城跡

— 千葉県立佐倉東高等学校共学化事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 —

平成16年10月29日発行

編 集	財団法人 千葉県文化財センター
発 行	千葉県教育委員会 千葉県中央区市場町1-1
	財団法人 千葉県文化財センター 四街道市鹿渡809-2
印 刷	株式会社 正文社 千葉県中央区都町1-10-6